二つ掛けカマドと推定した。燃焼部から煙道部には、段をもって移行していた。煙道部は長さ0.54ｍで、ほぼ水平に延びていた。煙り出し部は、径0.2ｍであった。

遺構の切り合い関係は、第21号区画溝より新しかった。

遺物は、カマド内およびその周辺から、土師器の坏（3）、須恵器の高台付椀（7・9・10・12・13）、土師器の甕（15）が出土した。

1から6は、土師器の坏Bである。6は底部が欠損している。黒色の付着物が口縁部に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

7から13は、高台付椀である。10・13が、須恵器（NS）である。ほかは、須恵器（HS）である。9の内面には、墨書「十」がみられる。8は黒色の付着物が口縁部内面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

14は、緑釉陶器の椀である。体部破片である。

15は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第169号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第248表　第169号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B	H	13.2	4.5		6.5	B, D, E	良好		明黄橙	90	
2	坏 B	H	11.8	4.0		5.3	B, D, E	普通		暗橙	100	
3	坏 B	H	11.8	3.9		6.3	B, D, E	普通		淡黄土	100	
4	坏 B	H	12.4	4.0		6.1	B, D, E	普通		暗橙	70	
5	坏 B	H	12.6	4.4		5.5	B, D, E	普通		暗橙	100	カマド
6	坏 B	H	12.0	3.6		6.2	B, E	普通		淡黄褐	30	
7	高台付椀	HS	12.0	5.7		5.5	B, C, E, I	良好		にぶい橙	80	
8	高台付椀	HS	12.4	5.1		5.8	B, C, H	良好		浅黄橙	90	
9	高台付椀	HS	12.0	5.3		6.3	B, C, E, I	良好		浅黄	90	
10	高台付椀	NS	12.6	4.9		5.6	B, E	良好		灰白	70	
11	高台付椀	HS	12.9	5.3		5.5	A, B, H, K	良好		灰白	80	
12	高台付椀	HS	13.6	5.7		5.7	A, B, C, G, H, K	良好		橙	80	
13	高台付椀	NS	12.5	5.8		6.1	A, B, E, H	良好		灰白	80	
14	高台付椀	M					B	普通		淡緑	5	
15	甕 A Ⅲ e	H	20.0				B, E, I	良好		浅黄橙	10	

第249表　第170号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	12.5	3.4		6.2	B, D, E	普通		黄土	30	
2	坏 A Ⅴ	H	13.0	3.2		9.1	B, D, E	普通		暗黄褐	30	
3	高台付椀	NS	15.7	7.1		6.9	B, E, I	良好		にぶい黄橙	95	
4	高台付皿	H	12.2	3.7		5.7	B, C, E	普通		黄褐色	80	
5	高台付皿	NS	12.6	2.6		6.9	B, D, E	良好		灰白		底部－100。口縁－15
6	皿	HS	13.8	2.3		6.1	B, C	良好		にぶい黄橙	60	
7	皿	HS	12.5	2.0		5.2	B, C, E	良好		にぶい黄橙	40	
8	高台付椀	K	15.2	5.6		7.0	B, D	良好		灰	30	
9	高台付皿	M					B	普通		淡緑		
10	甕 A Ⅲ c	H	18.2				B, E, H	良好		橙	25	
11	台付甕	H				10.6	B, E, H	良好		橙	70	
12	長頸壺	K					D	良好		灰白	10	

第170号住居跡（第287図）

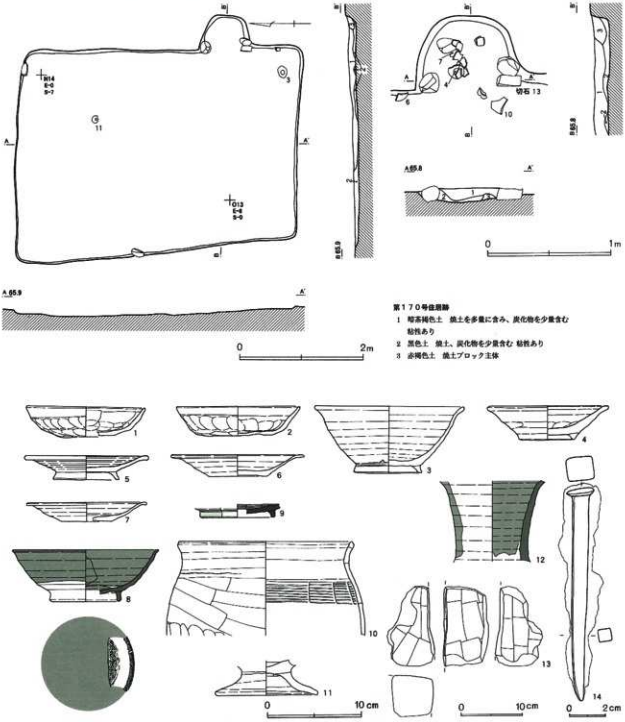
N・O－13・14グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・小穴などの遺構が密集し、さらに第21号区画溝の覆土と類似したため確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.46m・短辺3.12m・深さ0.11mであった。

主軸方位は、N－91°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の右側には、川原石を左側には、凝灰岩の切石と川原石を補強材と

第287図　第170号住居跡・出土遺物



して使用していた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第21号区画溝より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（4）・皿（7）、土師器の甕（10）が出土し、住居跡の南東隅からは、須恵器の高台付椀（3）が出土した。

1は、土師器の坏AⅥである。2は、土師器の坏AⅤである。4は、土師器の高台付皿である。1は底部が欠損している。

3は、須恵器（NS）の高台付椀である。5は、須恵器（NS）の高台付皿である。6・7は、須恵器（HS）の皿である。7は底部が欠損している。

8は、灰釉陶器の高台付椀である。底部が欠損している。

9は、緑釉陶器の高台付皿である。底部のみである。

10・11は、土師器の甕である。10は胴部中位以下が欠損している。11は脚部のみである。

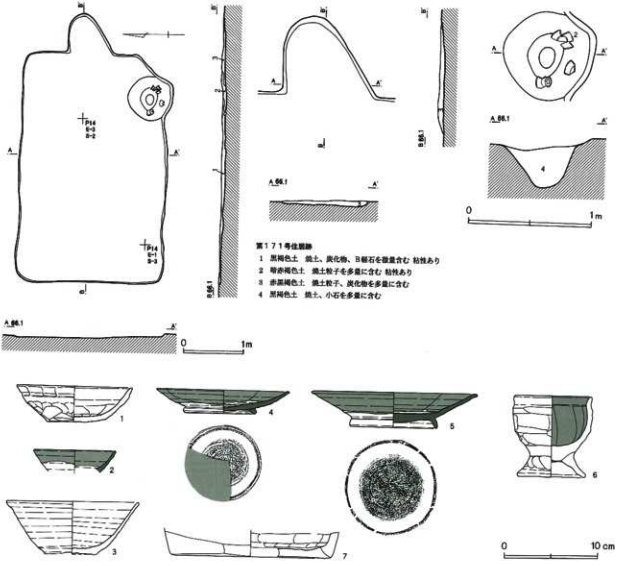
12は、灰釉陶器の長頸壺である。頸部のみである。

13は、凝灰岩の切石である。

14は、鉄製品の釘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第170号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第288図　第171号住居跡・出土遺物



第171号住居跡（第288図）

P－14グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであったが、確認面が砂利層であったことから、確認作業が困難であった。

住居跡の形状は、南東隅が歪む不整長方形であった。規模は、長辺3.63m・短辺2.38m・深さ0.17mであった。

主軸方位は、N－88°－Wであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。カマド部分は残存状況が悪く、構造など不明な点が多かった。袖は検出できず、造られなかったと判断した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

貯蔵穴は、カマドの右側で、住居跡の外に張り出して検出した。形状は円形で、規模は径0.69m・深さ0.31mであった。

遺構の切り合い関係は、第445号土壙より古かった。

遺物は、貯蔵穴から灰釉陶器の高台付椀（2）が出土した。

1は、土師器の坏Bである。

3は、須恵器（NS）の高台付椀である。

2は、灰釉陶器の高台付椀である。4は、灰釉陶器の高台付皿である。5は、灰釉陶器の段皿である。2は底部が欠損している。

6は、土師器の甕である。内面のみ黒色処理が施されている。

7は、須恵器（NS）の甕の底部である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第171号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第172号住居跡（第289図・第290図）

Q・R－14グリッドで確認した。周辺には、住居跡・溝などの遺構があったが、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺4.95m・短辺4.50m・深さ0.38mであった。

主軸方位は、N－81°－Eであった。

住居跡の中央付近に、一部比熱した、暗褐色土の貼り床を検出した。

カマドは、東壁のやや南寄りで検出した。袖は、地山を掘り残して造り、非常に短く住居跡内へ延びていた。燃焼部は円形に掘り込まれ、奥に向かって深くなっていた。燃焼部から煙道部へは、段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第41号溝より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（16）が出土し、住居跡の中央やや西寄りから、土師器の坏（4）、須恵器の高台付椀（7）が出土した。

1から4は、土師器の坏である。1は坏AⅥ、2は坏AⅣ、3・4は坏AⅤである。

5は、須恵器（NS）の椀である。6から9は、高台付椀である。6は須恵器（NS）、7・8は須恵器（HS）、9は須恵器（S）である。5は底部、6は高台が欠損している。

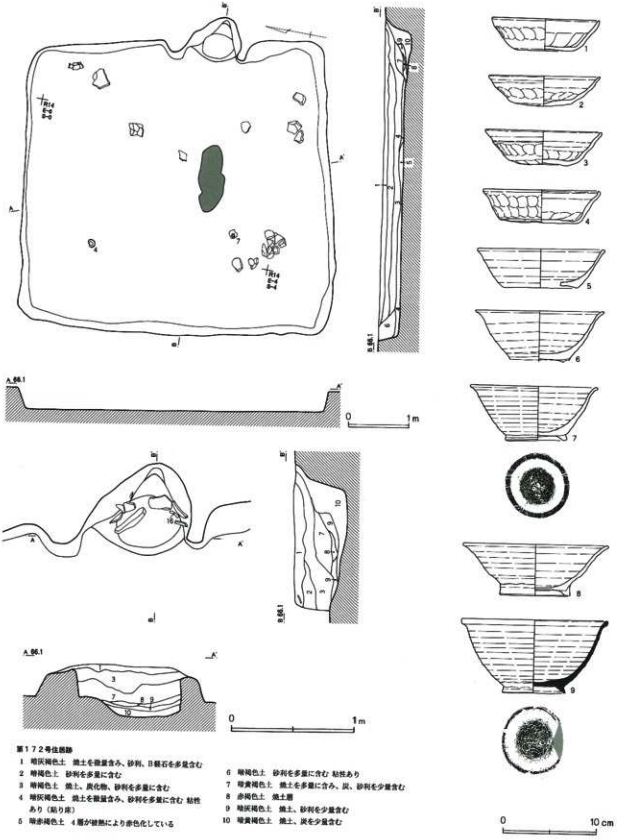
10・11は、灰釉陶器の高台付椀である。12は、灰釉陶器の段皿である。13・14は、灰釉陶器の皿である。11は口縁部が欠損している。13・14は底部のみである。

15・16は、土師器の甕である。胴部上位以下が欠損している。

第250表　第171号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	繊維	色調	残存	出土位置その他
1	坏B	H	12.2	3.8		6.2	B, D, E	普通		黄褐	50	カマド
2	高台付椀	K	8.6					良好		淡灰	20	
3	高台付椀	HS	13.9				B, D, I	普通		灰黄	90	貯穴
4	高台付皿	K	13.9	2.5		7.2	D	良好		暗灰	60	
5	段皿	K	17.0	3.7		9.1	B, D	良好		淡灰緑	70	
6	台付甕	H	8.0	8.6		7.0	B, E, H	普通		黄橙	60	
7	大甕	NS				15.8	D, G	良好		灰白	30	

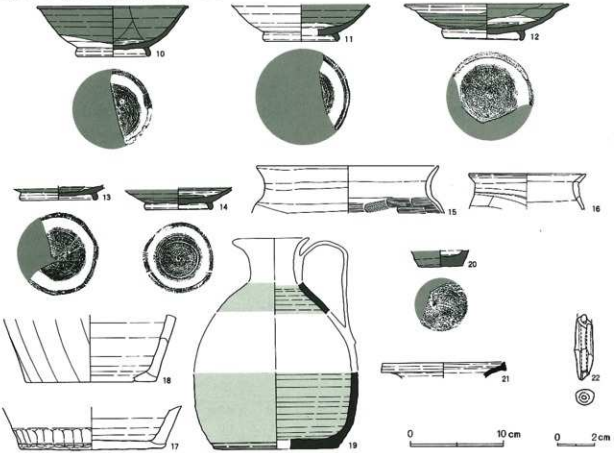
第289図　第172号住居跡・出土遺物（1）



第172号住居跡

1　暗灰褐色土　焼土を微量含み、砂利、日根石を多量含む
2　暗褐色土　砂利を多量に含む
3　暗褐色土　焼土、炭化物、砂利を多量に含む
4　暗灰褐色土　焼土を微量含み、砂利を多量に含む 粘性あり（貼り床）
5　明赤褐色土　4層が被熱により赤色化している
6　暗褐色土　砂利を多量に含む 粘性あり
7　暗黄褐色土　焼土を多量に含み、炭、砂利を少量含む
8　赤褐色土　焼土層
9　暗灰褐色土　焼土、砂利を少量含む
10　暗黄褐色土　焼土、炭を少量含む

第290図　第172号住居跡出土遺物（2）



第251表　第172号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	帯幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.3	3.4		5.8	B, C, E, H	不良		黄橙	20	
2	坏 A Ⅳ	H	11.6	3.3		5.9	B, D, E	不良		黒褐	60	
3	坏 A Ⅴ	H	12.1	3.7		5.1	B, E, H	普通		淡黄橙	20	
4	坏 A Ⅴ	H	12.2	3.5		7.1	B, G, H	普通		淡橙	100	
5	椀	N S	13.3	4.1		7.7	B, E, H	良好		灰白	40	
6	高台付椀	N S	13.5				B, E, I	普通		浅黄	50	
7	高台付椀	H S	13.4	5.9		6.0	B, C, E	良好		浅黄橙		底部－100%，他－40
8	高台付椀	H S	15.3	5.5		7.3	B	良好		灰黄褐	50	
9	高台付椀	S	15.4	7.7		6.5	B	良好		黄灰	40	
10	高台付椀	K	16.0	5.4		7.4	B, D	良好		灰白	30	
11	高台付椀	K				7.7	D	良好		暗灰	20	
12	段皿	K	17.4	3.8		8.0	D	良好		淡灰	40	
13	皿	K				7.8	D	良好		灰白	20	
14	皿	K				7.0	B	良好		淡灰白	20	
15	甕 A Ⅲ b	H	19.2				B, E	やや不良		浅黄橙	25	
16	台付甕	H	12.3				B, E	良好		外－灰白。内－浅黄橙	25	カマド
17	甕	H S				14.9	B	良好		橙	30	
18	羽釜	H S				13.3	B, C, E	良好		外－黒。内－にぶい橙	20	
19	手付瓶	M				18.2	B	普通		淡緑	10	
20	小瓶	K				4.7	D	良好		灰	10	
21	長頸壺	S	12.9				B, G	良好		青灰	15	

17は、須恵器（ＨＳ）の甕の底部である。18は、須恵器（ＨＳ）の羽釜である。底部のみである。

19は、緑釉陶器の手付瓶である。口縁部と胴部中位が欠損している。

20は、灰釉陶器の小瓶である。底部のみである。

21は、長頸壺である。口縁部のみである。

22は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第172号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第173号住居跡（第291図）

Ｑ・Ｒ－14・15グリッドで確認した。周辺には、住居跡・溝などの遺構がみられたが、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、南西隅のやや張る不整方形であった。規模は、長辺3.03ｍ・短辺2.89ｍ・深さ0.29ｍであった。

主軸方位は、Ｎ－3°－Ｗであった。

カマドは、北壁中央で検出した。袖は暗黄褐色土で造り付けられ、短く住居跡内に延びていた。焚き口部前面から燃焼部にかけては、楕円形の浅い掘り込みがみられた。燃焼部から煙道部には、段をもたずに移行していた。煙道部は細長く、煙り出し部に向かって緩やかに傾斜していた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド周辺から土師器の坏（３）・皿（７・８・10）が出土し、住居跡の北壁沿いから土師器の皿（９）、須恵器の高台付椀（13・16）が、住居跡の北東隅から土師器の坏（４）、須恵器の高台付椀（12・17）出土した。また、住居跡の中央から土師器の坏（１）、

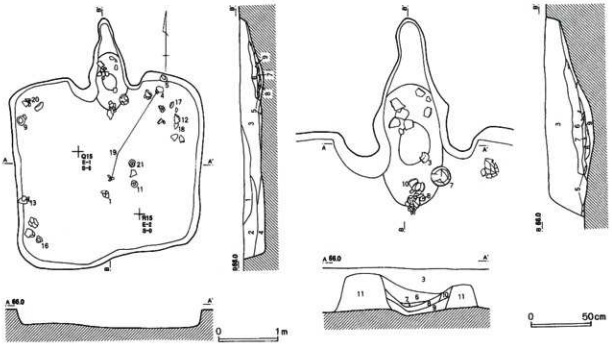
第252表　第172号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
22	橙	70		0.9	0.2	2.5	Ｃ２	Ⅱｂ	415	

第253表　第173号住居跡出土遺物観察表

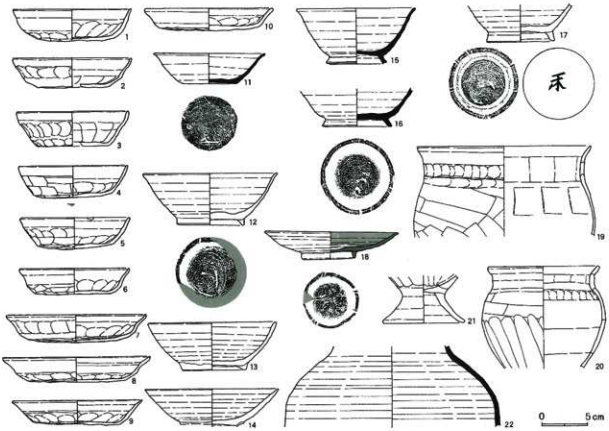
番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏Ａ Ⅳ	Ｈ	12.8	3.5		8.4	B, E	普通		黄褐	70	
2	坏Ａ Ⅳ	Ｈ	12.8	3.3		7.5	B, D, E	不良		明橙	20	
3	坏Ａ Ⅳ	Ｈ	12.0	3.8		7.7	B, E	良好		淡橙	40	カマド
4	坏Ａ Ⅱ	Ｈ	11.8	3.5		8.5	B, D, E	普通		暗橙	100	
5	坏Ａ Ⅱ	Ｈ	11.8	3.5		8.2	B, C, D, E	普通		明橙	100	
6	坏Ａ Ⅱ	Ｈ	11.8	2.9		8.2	B, C, E	不良		黄褐	70	
7	皿	Ｈ	15.1	3.0		8.6	B, E	普通		淡橙	100	カマド
8	皿	Ｈ	15.9	2.7		10.5	B, D, E, G	普通		淡橙	70	カマド
9	皿	Ｈ	14.0	2.7		9.1	B, D, E	普通		淡黄橙	100	
10	皿	Ｈ	13.8	2.4		10.5	B, C, D, E	普通		淡黄橙	30	カマド
11	椀	Ｓ	12.0	3.3		5.7	B	良好		灰	100	
12	高台付椀	ＮＳ	14.5	5.6		7.0	B, D	良好		灰白	70	
13	高台付椀	ＮＳ	13.8	5.1		6.7	B, D	普通		灰白	90	
14	高台付椀	ＮＳ	14.4				B, E, I	普通		灰白	25	
15	高台付椀	Ｓ	12.8	6.0		5.7	B	良好		黄灰	25	
16	高台付椀	Ｓ				7.3	B, D	良好		灰	40	
17	高台付椀	ＨＳ				7.1	B, I	良好		橙		底部－100
18	高台付皿	Ｋ	14.1	3.1		5.5	B	良好		灰白	70	
19	甕Ｂ Ⅲｃ	Ｈ	18.8				B, E	良好		橙	40	カマド
20	台付甕	Ｈ					A, B, E	良好		橙	30	
21	台付甕	Ｈ				8.5	B, E, H	良好		外－橙。内－灰白	100	
22	広口長頸壺	Ｓ					B, G, K	良好		青灰	20	

第291図　第173号住居跡・出土遺物



第173号住居跡

1　暗灰褐色土　砂利を多量に含み、B軽石を少量含む
2　暗褐色土　焼土を少量含み、砂利を多量含む　粘性あり
3　暗褐色土　焼土を多量に含む　粘性あり
4　暗灰褐色土　砂利層
5　暗灰褐色土　砂利主体　粘性のある土を少量含む
6　暗茶褐色土　焼土、砂利を多量に含む　砂質
7　暗茶褐色土　焼土を微量含み、炭を少量含む
8　赤褐色土　焼土ブロック主体　砂を多量に含む
9　暗褐色土　焼土を少量含み、炭を多量に含む
10　赤褐色土　焼土、褐色土を少量含む（地床炉周上）
11　暗黄褐色土　白色粒子を含む　粘性あり（地形復築土）



須恵器の坏（11）、土師器の甕（19・21）が出土した。

1から6は、土師器の坏である。1から3は坏AⅣ、4から6は坏AⅡである。7から10は、土師器の皿である。2・3は底部が欠損している。

11は、須恵器（S）の椀である。12から17は、高台付椀である。12から14は、須恵器（NS）である。15・16は、須恵器（S）である。17は、須恵器（HS）である。底部外面に墨書「床」がみられる。14は高台、16・17は口縁部が欠損している。

18は、灰釉陶器の高台付皿である。

19から21は、土師器の甕である。19は胴部中位以下、20は胴部下位以下が欠損している。21は脚部のみである。

22は、須恵器の甕である。胴部上位のみである。

以上、出土遺物から第173号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第174号住居跡（第292図・第293図・第294図）

Q－15・16グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺4.04ｍ・短辺3.65ｍ・深さ0.50ｍであった。

主軸方位は、N－93°－Eであった。

カマドは、北壁と東壁に三基検出した。1・2号カマドは、覆土の堆積状況から住居跡の埋没まで共用していたと推定した。

1号カマドは、北壁のやや東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、非常に短かかった。焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形の極く浅い窪みがみられた。燃焼部から煙道部へは、階段状に段をもって移行していた。

2号カマドは、東壁の中央で検出した。カマドの構築前に、暗灰褐色土を床面に貼り、その上に暗黄褐色土で袖を造り付けていた。燃焼部全体が住居跡内に造られており、底面は浅く円形に掘り込まれていた。燃焼部と煙道部の境には、段がみられなかった。煙道部は、急な傾斜で立ち上がっていた。カマド周辺から、川原石がまとまって出土した。カマドの構築材と判断した。

3号カマドは、2号カマドにより破壊されていた。燃焼部の底面には、小さな凹凸があったが、掘り込みはみられなかった。燃焼部と煙道部の境に段はみられなかった。煙道部は、緩やかに傾斜し、煙り出し部手前で水平に延びていた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、2号カマド内から土師器の鉢（7）・甕（8）が出土した。

1から4は、土師器の坏である。3・4は、坏AⅣである。1から3は底部が欠損している。

5は、須恵器（NS）の椀である。6は、須恵器（HS）の高台付皿である。6は底部が欠損している。

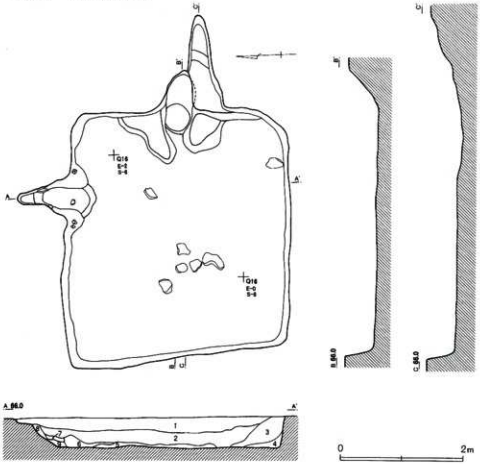
7は、土師器の鉢である。底部が欠損している。

8から10は、土師器の甕である。8は底部、9・10は胴部中位以下が欠損している。

第254表　第174号住居跡出土遺物観察表

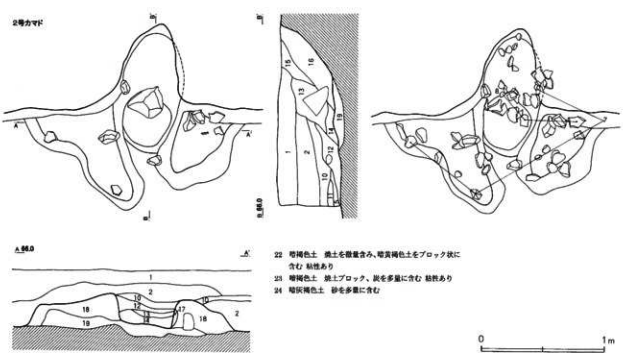
番号	器種	模別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	鞴羽	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A	H	11.1	2.6		5.6	B, D, E	普通		黄橙	30	
2	坏 A	H	10.9				B, E, G	普通		暗橙	30	
3	坏 A Ⅳ	H	11.5	3.4		8.0	B, D, E, G	不良		黄褐	70	カマド
4	坏 A Ⅳ	H	12.4	3.2		6.0	B, D, E	普通		黄橙	70	
5	椀	NS	12.3	4.2		5.7	B	良好	R	灰白	75	
6	高台付皿	HS	12.8				B	良好	R	灰黄	25	
7	鉢	H	20.3	9.4		7.9	B, D, E	普通		黄褐	40	カマドA
8	甕 B Ⅲ c	H	20.5				B, E	良好		橙		口縁－100。他－30。カマドA
9	甕 B Ⅱ b	H	20.9				B, E, H	良好		浅黄橙	25	カマドB
10	甕 B Ⅱ b	H	19.8				D, E, H	良好		橙	15	

第292図　第174号住居跡



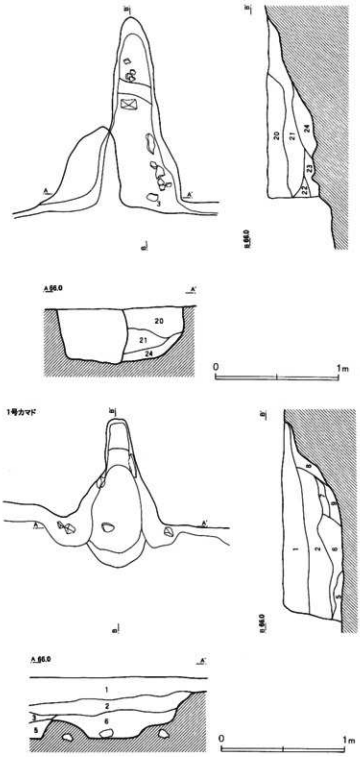
第174号住居跡

1　暗黄褐色土　砂利主体 焼土を少量含み、白色粒子を多量に含む
2　暗褐色土　焼土、砂利を多量に含む 粘性あり
3　暗灰褐色土　砂利主体
4　暗黄褐色土　焼土粒子を微量含む（砂利層）
5　暗灰褐色土　砂利層
6　暗灰褐色土　砂利主体 焼土を微量含む
7　暗黄褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含み、砂を多量に含む 粘性あり
8　暗灰褐色土　砂利主体 焼土粒子を微量含む
9　暗灰褐色土　砂利主体 暗黄褐色土少量含む 粘性あり
10　暗褐色土　焼土、炭を少量含み、暗黄褐色粘土少量含む
11　暗黄褐色土　粘土主体 暗褐色土を多量含む 粘性あり
12　暗灰褐色土　砂利主体
13　暗黄褐色土　砂利を少量含む
14　暗赤褐色土　焼土多量含む 粘性あり（天井部崩落土）
15　暗黄褐色土　焼土を少量含む 粘性あり
16　暗黄褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
17　赤褐色土　粘土が被熱で赤色化 粘性あり（焼焼部壁）
18　暗黄褐色土　焼土、大形礫を多量に含み、粘土、砂を少量含む 粘性あり
19　暗灰褐色土　砂利主体 焼土混じりの暗褐色土を多量に含む
20　暗灰褐色土　小礫を多量に含む 砂質
21　暗褐色土　焼土、炭化粒子を少量含む



22　暗褐色土　焼土を微量含み、暗黄褐色土をブロック状に含む 粘性あり
23　暗褐色土　焼土ブロック、炭を多量に含む 粘性あり
24　暗灰褐色土　砂を多量に含む

第293図　第174号住居跡カマド



11は、凝灰岩の切石である。

12は、鉄製品の刀子である。

以上、出土遺物から第174号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第175号住居跡（第295図）

R・S－13・14グリッドで確認した。周辺は、溝・掘立柱建物跡などの遺構が密集し、また三棟の竪穴式住居が重複していたため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.13m・短辺3.25m・深さ0.60mであった。

主軸方位は、N－1°－Wであった。

カマドは、北壁の北東隅寄りに検出した。袖を造らず、焚き口部の両側に、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部は整った方形で、底面の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部への移行部に、構築材の川原石が出土した。

遺構の切り合い関係は、第176・177号住居跡より古く、第13号区画溝より新しかった。

1は、土師器の坏である。2・3は、土師器の坏AⅣである。1は底部が欠損している。

4・5は、須恵器（NS）の高台付皿である。底部が欠損している。

6は、土師器の甕である。胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第175号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

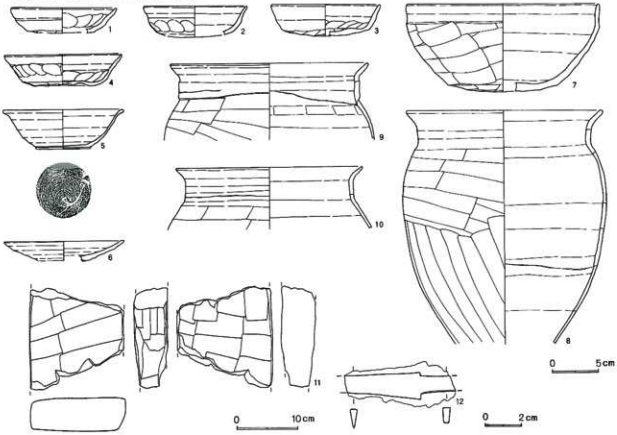
第176号住居跡（第296図）

R－13・14グリッドで確認した。周辺は、溝・掘立柱建物跡などの遺構が密集し、また三棟の竪穴式住居跡が重複していたため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.04m・短辺3.57m・深さ0.35mであった。

主軸方位は、N－107°－Eであった。

第294図　第174号住居跡出土遺物



カマドは、東壁の中央に並んで二基を検出した。覆土の状況から1号カマドから2号カマドに付け替えたと判断した。

1号カマドの袖は検出できなかったが、燃焼部の位置から、造り付けられていたと推定した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

2号カマドの袖は、暗褐色土で造り付けられ、住居跡内へ延びていた。両袖の先端には、川原石が補強材

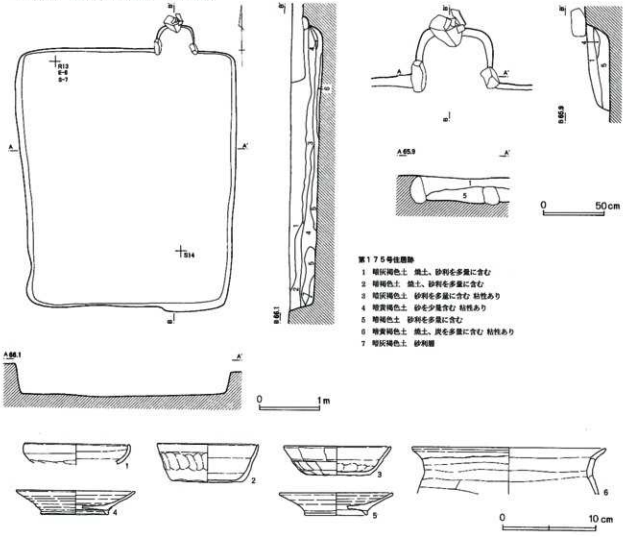
第255表　第175号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏	H	10.9				B, E, H	不良		こげ茶	10	貯蔵穴
2	坏 A Ⅳ	H	10.6	4.1		7.3	B, D	普通		黄褐	30	
3	坏 A Ⅳ	H	11.2	3.1		6.8	B, E, H	良好		黄橙	20	
4	高台付皿	N S	12.4	2.6		7.0	B, E, G	良好		灰白	50	カマド
5	高台付皿	N S	12.0	2.4		6.5	B, E	良好		灰白	20	
6	甕 B Ⅱ イ	H	20.5				B, H	良好		橙	20	

第256表　第176号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B	H	11.0	4.0		5.1	B, E, H	普通		黄褐	20	
2	坏 B	H	12.0	4.5		6.0	B, E, H	普通		暗橙	60	
3	高台付椀	H S				6.0	B, E	良好		浅黄橙	100	
4	甕 A Ⅲ b	H	18.9				B, E, H	良好		浅黄橙	20	カマド

第295図　第175号住居跡・出土遺物



として使用されていた。右袖の先端付近からは、燃焼部内に落ち込むように細長い大形の川原石が出土したことから、焚き口部は、鳥居状に石を組んでいたと判断した。焚き口部の前面には、長径0.67m・深さ0.13mの楕円形の掘り込みを検出した。燃焼部は、不整長方形に浅く窪んでいた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は短く、煙り出し部はほぼ垂直に立ち上がっていた。

貯蔵穴は、2号カマドの右側南東隅に検出した。形状は、円形であった。規模は、径0.71m・深さ0.15mであった。

遺構の切り合い関係は、第175号住居跡・第13号区画溝より新しかった。

1・2は、土師器の坏Bである。1は底部が欠損している。

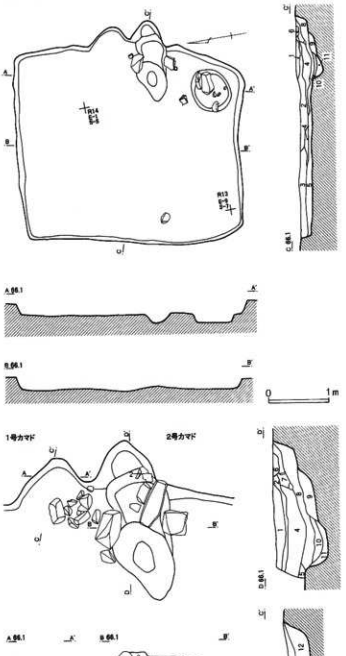
3は、須恵器（HS）の高台付椀である。底部のみである。

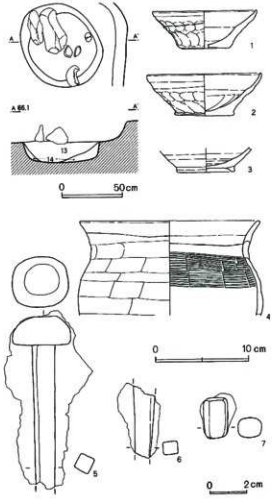
4は、土師器の甕である。胴部下位以下が欠損している。

5から7は、鉄製品である。5は釘、6は棒状鉄製品である。7は楔の一種であろうか。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第176号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第296図　第176号住居跡・出土遺物





第176号住居跡

1　暗褐色土　焼土、炭化物を微量含み、B軽石を多量含む
2　暗灰褐色土　焼土を少量含み、B軽石をブロック状に少量含み、砂利を多量に含む 粘性あり
3　暗褐色土　砂利主体 粘性あり
4　暗褐色土　焼土、焼土ブロック、炭化物を少量含み、礫を含む
5　暗灰褐色土　砂利層
6　暗黄褐色土　焼土、焼土ブロック主体 暗黄褐色土を少量含む
7　暗黄褐色土　焼土、炭化物を少量含む
8　灰褐色土　焼土を微量含み、炭化物、灰を多量に含み、礫を含む
9　灰褐色土　焼土、炭化物微量含み、砂礫少量含む 砂質
10　灰褐色土　焼土、炭を少量含み、砂礫を多量に含む
11　灰褐色土　焼土を微量含み、砂礫を多量に含む 砂質
12　灰褐色土　焼土、炭化物を微量含む 砂質
13　暗褐色土　焼土を少量含み、炭化物を多量に含む
14　暗灰褐色土　砂利主体 焼土を微量含む

第177号住居跡（第297図・第298図）

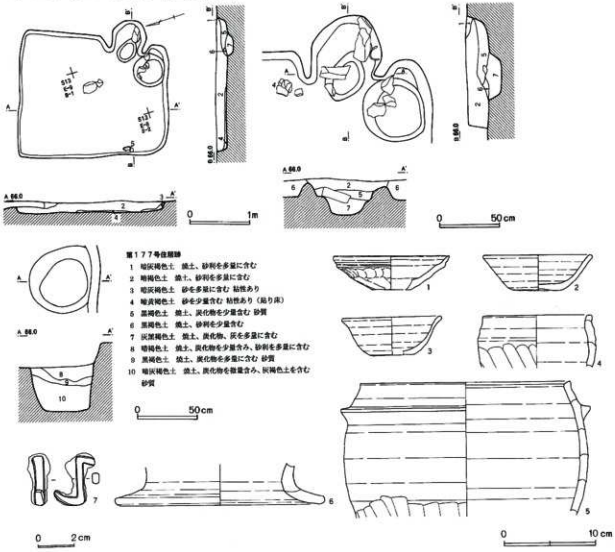
S－13グリッドで確認した。周辺は、溝・掘立柱建物跡などの遺構が密集し、また三棟の竪穴式住居跡が重複したため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.45ｍ・短辺1.97ｍ・深さ0.40ｍであった。

主軸方位は、N－18°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内に短く延びていた。焚き口部に、長径0.47ｍ・深さ0.13ｍの楕円形の掘り込み

第297図　第177号住居跡・出土遺物（1）



を検出した。ここから多量の焼土、炭化物が出土した。燃焼部の掘り込みはみられたかった。また、燃焼部の右側と焚き口部に、丸瓦（8・9）が補強材として使用されていた。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅に検出した。形状は円形で規模は、径0.5m・深さ0.36mであった。覆土の中程に炭化物層を確認した。

遺構の切り合い関係は、第175号住居跡、第13号区画溝より新しかった。

1は、土師器の坏Bである。底部が欠損している。

2・3は、須恵器（NS）の椀である。3は底部が欠損している。

4は、須恵器（NS）の甕である。胴部下位以下が欠損している。

5は、須恵器（HS）の羽釜である。胴部下位以下が欠損している。

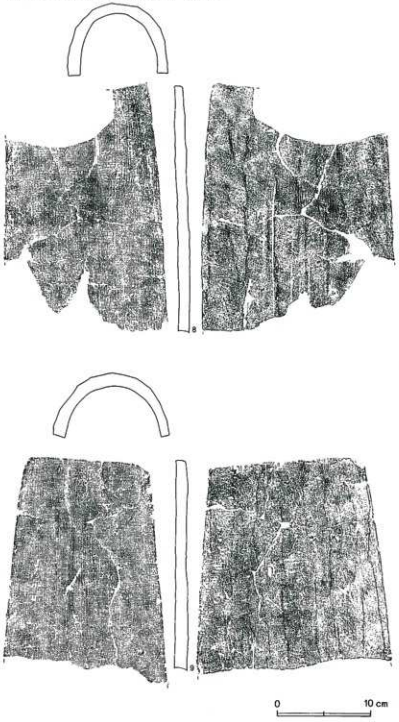
6は、須恵器（NS）の甑である。底部のみである。

7は、フック状の鉄製品である。用途は不明である。

8・9は、丸瓦である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第177号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第298図　第177号住居跡出土遺物（2）



第257表　第177号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
8	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	3面面取り
9	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	3面面取り

第178号住居跡（第299図・第300図）

T－15・16グリッドで確認した。周辺は、住居跡・掘立柱建物跡・土壙などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、南東部がやや張り北西隅の屈曲する不整方形であった。規模は、長辺4.54m・短辺3.72m・深さ0.38mであった。東壁と北壁の一部には、幅0.2mの壁溝を検出した。

住居跡内から三基の土壙を検出した。1号土壙は、楕円形で規模は、長径0.65m・短径0.43m・深さ0.05m。2号土壙は、楕円形で規模は、長径0.58m・短径0.39m・深さ0.08m。3号土壙は、不整楕円形で規模は、0.65m・短径0.40m・深さ0.21mであった。また、住居跡の南壁沿いには、小穴二基を検出した。入口施設と推定した。1号小穴は、径0.56m・0.27mであった。2号小穴は、径0.6m深さ0.18mであった。この2号小穴は、貯蔵穴とも考えられた。

主軸方位は、N－16°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は検出できず、当初から造られていなかったと判断した。燃焼部は、整った方形で、底面は浅く円形に窪んでいた。燃焼部から煙道部へは、極く小さな段をもって移行していた。煙道部は、地山を掘り抜いて造られていた。長さ0.89mと細長く、煙り出し部に向かって、緩やか

第258表　第177号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏B	H	12.4	3.7		4.3	B, E, H	普通		黄褐	30	
2	椀	N S	11.6	3.9		4.9	A, B, H	甘い		淡黄	40	
3	椀	N S	10.6	4.1		4.5	B, H	良好		灰白	20	
4	ロクロ甕	N S	11.4				E, G, H, K	良好		灰白	60	カマド
5	羽B I	H S	22.8		3.0		B, C, E, H	良好		外－黒褐。内－橙	15	カマド。貯蔵穴
6	甑底部	N S				21.6	C, E, H	やや不良		浅黄橙	15	

に傾斜していた。

カマド左側からは、大形の川原石をコの字に組んだカマドに似た施設を検出した。燃焼部にあたる部分は、底面が被熱していた。このような施設は、調査区内には本住居跡だけであった。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅に検出した。形状は、不整円形で規模は、径0.57m・深さ0.18mであった。貯蔵穴から2号土壙にかけては、不整形に浅く掘り込まれていた。

遺構の切り合い関係は、第42号掘立柱建物跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（10）が出土し、石組みのカマド状遺構から土師器の甕（13）・羽釜（14）が出土した。また、貯蔵穴内から須恵器の高台付椀（6）、2号小穴内から土師器の坏（3）、須恵器の高台付椀（5・7）が出土した。

1から3は、土師器の坏Bである。4は、土師器の高台付坏Bである。4は高台が欠損している。

5・6は、須恵器（HS）の高台付椀である。

7は、須恵器（NS）の高脚高台付椀である。

8は、灰釉陶器の高台付椀である。底部が欠損している。

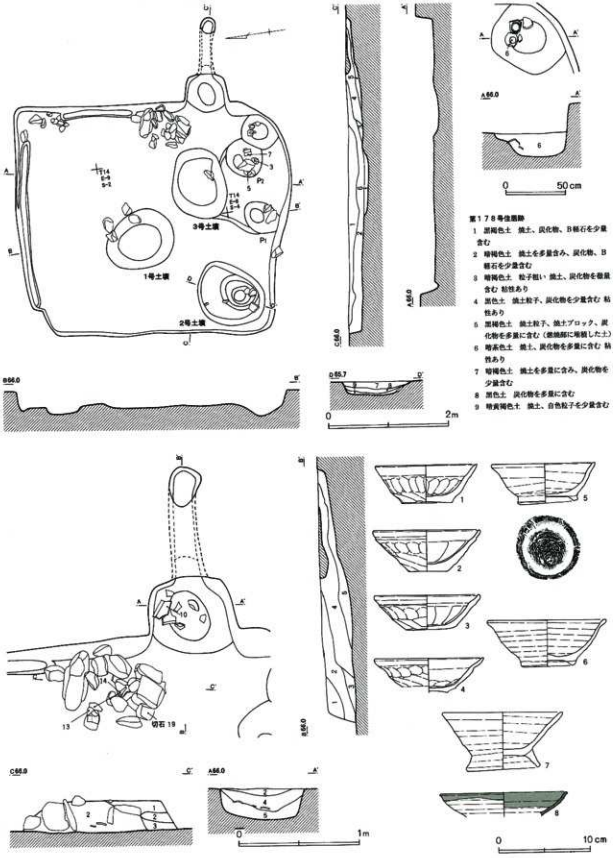
第259表　第178号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏B	H	10.9	4.1		5.4	B, D, E	普通		黄褐	30	
2	坏B	H	11.5	4.5		4.1	B, D, E	普通		暗黄土	60	
3	坏B	H	11.3	3.8		5.0	B, E,	良好		暗褐	100	カマド　砂
4	坏B	H	11.6				B, E, H	不良		明橙	80	
5	高台付椀	H S	11.1	5.4		5.7	B, C, E, G	良好		浅黄橙	100	
6	高台付椀	H S	12.7	5.1		5.1	B, E, I	普通		にぶい橙	80	
7	高脚高台付椀	N S	13.0	6.4		7.6	B, G, I	良好		灰黄	100	
8	高台付椀	K	13.6				D	良好		灰白	10	
9	甕AⅣd	H	20.7				B, E, H	良好		にぶい黄橙	30	
10	甕AⅢd	H	19.6				B, E, H	良好		橙	30	カマド
11	甕CⅣ	H	12.5				B, E	良好		橙	25	
12	甕CⅣ	H	20.0				B, E, H	良好		橙	15	
13	甕	H				3.2	B, E	良好		浅黄橙	70	
14	羽AⅠaイ	N S	20.6	26.6	3.3	5.5	B, E, G, H	良好		灰白		胴下位－100。他－10
15	羽AⅡaロ	N S	18.3		2.8		B, E	良好		灰白	20	
16	羽BⅡb	N S	21.8		2.6		B, E, H	良好		浅黄橙	20	
17	置きカマド	H				30.2	A, B, E, H	良好		浅黄橙	5	

第260表　第178号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
18	にぶい橙	30		0.8	0.2	1.0	C 2	Ⅲb	416	

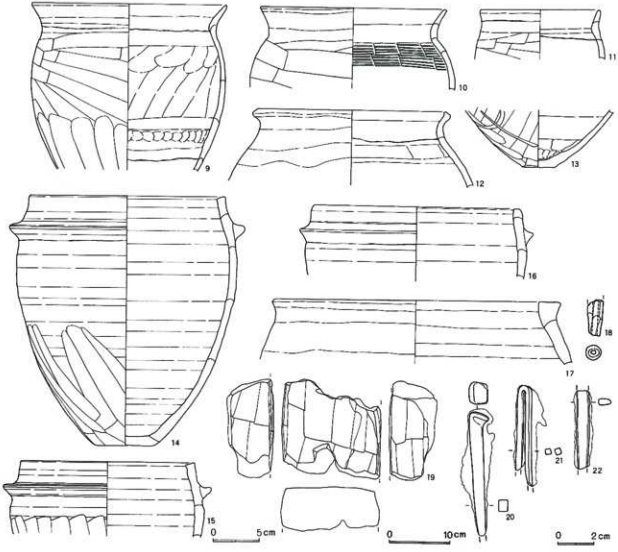
第299図　第178号住居跡・出土遺物（1）



第178号住居跡

1 黒褐色土　焼土、炭化物、B軽石を少量含む
2 暗褐色土　焼土を多量含み、炭化物、B軽石を少量含む
3 暗褐色土　粒子粗い焼土、炭化物を微量含む　粘性あり
4 黒色土　焼土粒子、炭化物を少量含む　粘性あり
5 黒褐色土　焼土粒子、焼土ブロック、炭化物を多量に含む（壁地部に堆積した土）
6 暗赤色土　焼土、炭化物を多量に含む　粘性あり
7 暗褐色土　焼土を多量に含み、炭化物を少量含む
8 黒色土　炭化物を多量に含む
9 暗黄褐色土　焼土、白色粒子を少量含む

第300図　第178号住居跡出土遺物（2）



9から13は、土師器の甕である。9は胴部下位以下、10から12は胴部中位以下が欠損している。13は底部のみである。

14から16は、羽釜である。15・16は胴部中位以下が欠損している。

17は、土師質の置きカマドである。掛け口のみである。

18は、土錘である。

19は、凝灰岩の切石である。

20から22は、鉄製品である。20は釘、21・22は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第178号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第179号住居跡（第301図）

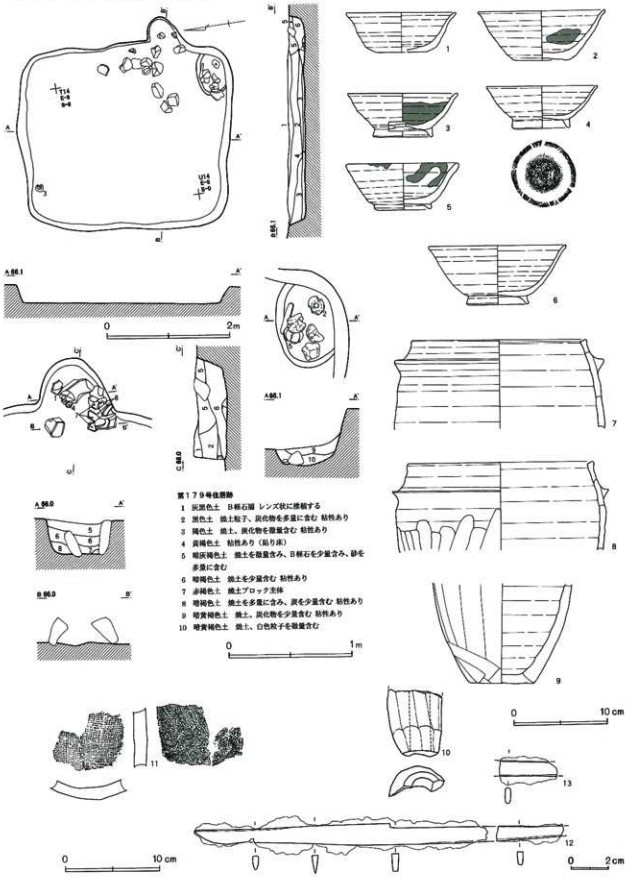
T・U－14グリッドで確認した。周辺は、土壙・溝などの遺構が、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.40m・短辺2.89m・深さ0.28mであった。

主軸方位は、N－100°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。左袖は、掘り過ぎで造り付けかどうか判断できなかった。左袖の先端と焚き口部の右側に、川原石を補強材として使用していた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼

第301図　第179号住居跡・出土遺物



第179号住居跡

1　灰黒色土　B軽石層 レンズ状に堆積する
2　黒色土　焼土粒子、炭化物を多量に含む 粘性あり
3　褐色土　焼土、炭化物を微量含む 粘性あり
4　黄褐色土　粘性あり（貼り床）
5　明灰褐色土　焼土を微量含み、B軽石を少量含み、砂を多量に含む
6　暗褐色土　焼土を少量含む 粘性あり
7　赤褐色土　焼土ブロック主体
8　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭を少量含む 粘性あり
9　暗黄褐色土　焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
10　暗黄褐色土　焼土、白色粒子を微量含む

部中央から、川原石の支脚が出土し、一つ掛けカマドと判断した。カマド周辺からは、構築材の川原石が出土した。

貯蔵穴は、カマドの右側で検出した。形状は、楕円形で規模は、長径0.65m・短径0.47m・深さ0.14mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内から羽釜（7・8）が出土し、貯蔵穴内から須恵器の坏（2）が出土した。

1・2は、須恵器（HS）の椀である。3から6は、須恵器（HS）の高台付椀である。1は底部が欠損している。3は内面体部から底部、5は口縁部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

7から9は、羽釜である。7は、須恵器（HS）である。8・9は、須恵器（NS）である。7・8は胴部中位以下が欠損している。9は底部のみである。

10は、土錘である。

11は、平瓦である。

12・13は、鉄製品である。12は刀子、13も刀子の茎部破片と考えられる。

以上、出土遺物から第179号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第180号住居跡（第302図・第303図・第304図）

T−14、U−13・14グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らであったが、遺構確認面が砂利層のためと、古墳時代の住居跡と重複していたため、確認に手間取った。

住居跡の西側は、調査区外のため全容は不明である。住居跡の形状は、方形と推定した。規模は、長辺5.15m・深さ0.35mであった。

主軸方位は、N−95°−Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに並んで二基検出した。覆土の堆積状況から1号カマドから2号カマドへ付け替えたと推定した。

1号カマドは、左袖を検出できなかったが、燃焼部の位置から、造り付けられていたと推定した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

2号カマドの左袖は、地山を掘り残して造られていた。右袖は、住居跡の壁をそのまま利用した「片袖型」カマドであった。右袖と焚き口部の左側には、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部は、浅く円形

第261表　第179号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
11	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	−

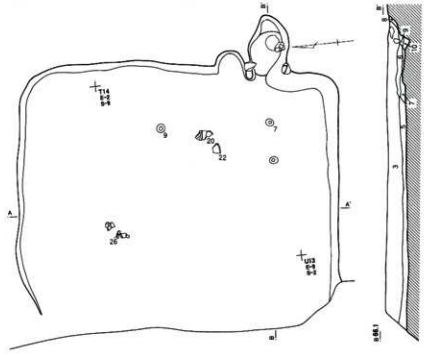
第262表　第179号住居跡出土遺物観察表

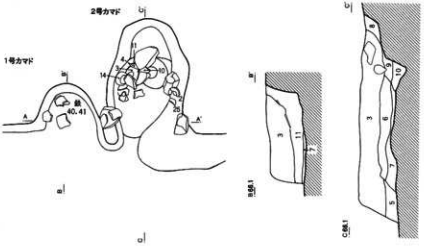
番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸薬	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	11.6	4.2		5.4	A, B, E, H	良好		浅黄橙	20	カマド
2	椀	HS	13.4	5.3		5.4	C, H, I	良好		灰褐		底部−100。口縁−25。貯穴
3	高台付椀	HS	11.5	4.6		6.0	B, C, H	良好		灰白	90	
4	高台付椀	HS	11.7	5.5		5.7	A, C, G, H, K	やや不良		浅黄橙	60	カマド
5	高台付椀	HS	11.6	4.9		5.5	B, E, H	良好		淡黄	800	貯穴
6	高台付椀	HS	14.5	6.2		6.2	C, H, I	良好		浅黄橙		底部−100。口縁−20
7	羽BⅡa	HS	18.4			2.4	A, B, E, H	良好		浅黄橙	20	カマド
8	羽AⅠaロ	NS	19.5			3.0	B, E	良好		灰白	20	カマド
9	羽釜底部	NS				6.6	A, B, E, H	良好		灰白		底部のみ−100

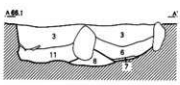
第263表　第179号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
10	浅黄橙	25				12.9	A1	胴	12	

第302図　第180号住居跡・出土遺物（1）

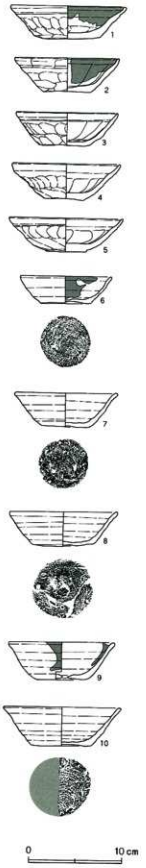




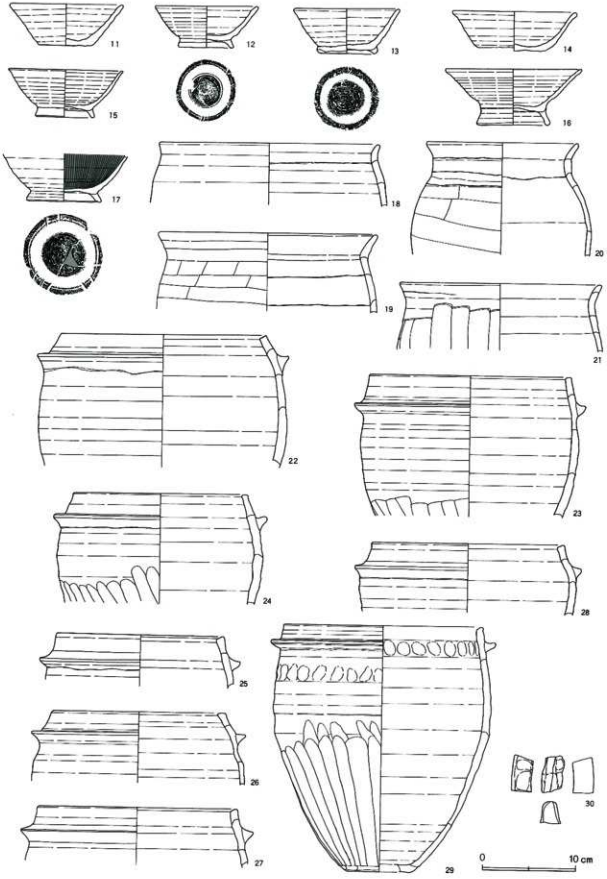


第180号住居跡

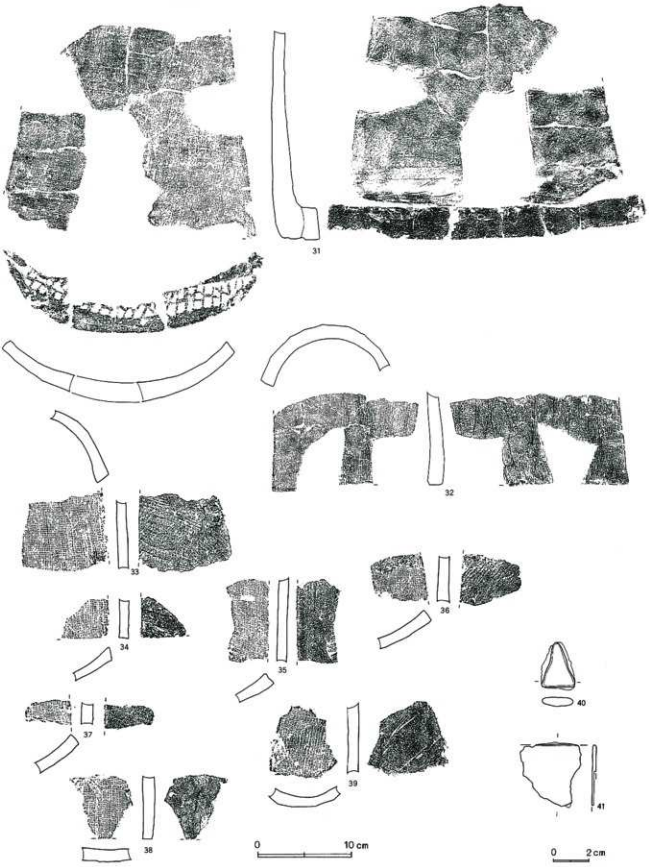
1　暗茶褐色土　B軽石を多量に含み、小礫を少量含む
2　暗茶褐色土　焼土を多量に含み、B軽石をしもふり状に多量に含む 粘性あり
3　暗茶褐色土　焼土を多量に含み、B軽石をしもふり状に少量含む 粘性あり
4　暗灰褐色土　暗灰褐色粘土をしもふり状に多量に含む 粘性あり
5　暗褐色土　暗灰褐色粘土を少量含む 粘性あり
6　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭を少量含む 粘性あり
7　暗黄褐色土　焼土、炭を多量に含む 粘性あり
8　暗黄褐色土　小礫、砂利を少量含む
9　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含む 粘性あり
10　黒色土　炭、砂を多量に含む
11　暗褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり



第303図　第180号住居跡出土遺物（2）



第304図　第180号住居跡出土遺物（3）



に窪んでいた。燃焼部奥には、深さ0・08mの掘り込みを検出した。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、古墳時代の第004号住居跡より新しかった。

遺物は、1号カマド内から鉄製品（40・41）が、2号カマド内から土師器の坏（2・3・4）、須恵器の坏（10・11）・高台付椀（14）、羽釜（25）が出土した。カマド前面の住居跡の東側からは、須恵器の坏（7・9）、土師器の甕（20）、羽釜（22）が出土した。

1から5は、土師器の坏Bである。1・2は黒色の付着物が口縁部内面に確認できる。

6から10は、椀である。7が須恵器（NS）の他は、須恵器（HS）である。6は黒色の付着物が内面口縁部から体部にかけて確認できる。油煙の痕跡と考えられる。9は黒色の付着物が口縁部に確認できる。油煙または漆の痕跡と考えられる。

11から15は、須恵器（NS）の高台付椀である。

16は、須恵器（NS）の高脚高台付椀である。

17は、黒色土器の高台付椀である。口縁部が欠損している。

18は、須恵器（HS）の甕である。19から21は、土師器の甕である。22から29は、羽釜である。28・29は、須恵器（NS）である。ほかは、須恵器（HS）であ

第264表　第180号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏B	H	12.1	3.9		6.0	B, E	普通		暗橙	70	砂
2	坏B	H	10.9	3.6		4.9	B, E, H	不良		暗茶	50	カマド　砂
3	坏B	H	10.7	3.6		5.5	B, C, D, E	良好		こげ茶	80	カマド　砂
4	坏B	H	11.3	3.9		4.2	B, E, H	普通		暗黄褐	40	カマド
5	坏B	H	12.1	3.6		4.1	B, D, E	不良		黄褐	40	砂
6	椀	HS	9.6	2.9		5.2	B, E, I	良好		にぶい黄橙	100	
7	椀	NS	10.8	3.2		5.0	B, E, G	良好		灰黄	100	
8	椀	HS	11.3	3.6		6.2	B, E	普通		にぶい黄橙	95	
9	椀	HS	11.0	4.0		5.0	A, B, C, H	良好		浅黄橙	100	
10	椀	HS	12.3	4.1		6.0	B, H	良好		浅黄橙	20	カマド
11	高台付椀	NS	11.8	4.5		5.5	B, H	良好		浅黄橙	50	カマド
12	高台付椀	NS	10.7	4.4		5.5	C, H, I	良好		橙		底部－100。口縁－50
13	高台付椀	NS	11.1	4.8		5.7	B, E	良好		黄灰	100	
14	高台付椀	NS					A, B, H, K					
15	高台付椀	NS	11.9	5.0		5.9	B, E, G, I	普通		浅黄	70	
16	高脚高台付椀	NS	14.4	5.9		7.2	B, C, E	普通		浅黄	70	
17	高台付椀	黒色				7.6	E, G	良好		外－にぶい橙。内－褐灰	30	
18	ロクロ甕	HS	23.1				B, C, E, H	良好		浅黄橙	10	
19	甕AⅣd	H	22.8				B, E	良好		浅黄	20	
20	甕BⅢc	H	15.9				B, E, H, K	良好		浅黄	20	
21	甕C	H	21.2				B, E, I	良好		黄橙	20	
22	羽BⅠa	HS	21.7		2.4		B, C, E, H	良好		浅黄橙	15	
23	羽BⅡa	HS	21.0		3.1		A, B, E, H	良好		浅黄橙	20	
24	羽AⅡaロ	HS	18.2		2.5		B, E, H	良好		浅黄橙	30	
25	羽AⅡaロ	HS	17.5		2.8		B, H	良好		浅黄橙	15	カマド
26	羽BⅡa	HS	17.8		2.4		B, E, H	良好		にぶい黄橙	40	
27	羽BⅡa	HS	21.0		2.5		A, B, E, H	良好		外－橙。内－灰白	10	
28	羽AⅠaイ	NS	20.2		2.7		A, B, E, H	良好		灰白	15	
29	羽BⅡa	NS	21.0	26.1	1.9	6.8	B, C, E	良好		口縁、灰白。底部、浅黄橙		口縁－80。他－20
30	脚付釜	HS					B, E, H	良好		橙	5	

る。18・19・21・25から28は胴部中位以下、20・22から24は胴部下位以下、29は底部が欠損している。

30は、須恵器（ＨＳ）の脚付釜の脚部である。

31は、軒平瓦である。32・33は、丸瓦である。34から39は、平瓦である。

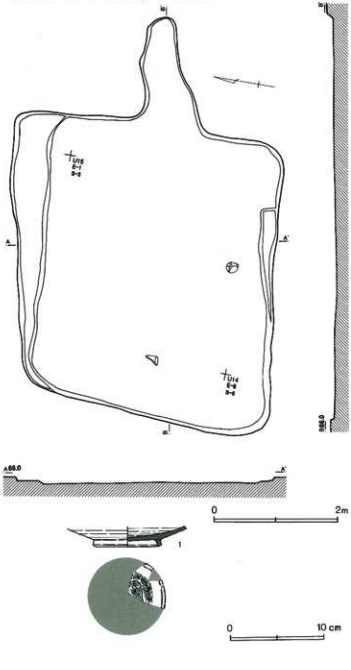
40・41は、鉄製品である。40は三角形の板状鉄製品、41は薄い板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第180号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第265表　第180号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
31	軒平瓦	中間	刷り消し	布	3面面取り
32	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
33	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
34	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
35	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
36	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
37	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
38	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
39	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

第305図　第181号住居跡・出土遺物



第181号住居跡（第305図）

Ｕ－14・15グリッドで確認した。住居跡の形状は、南西隅が張り出す不整長方形であった。規模は、長辺4.70ｍ・短辺4.20ｍ・深さ0.19ｍであった。北壁と南壁の一部が、階段状に小さく高くなっていた。

主軸方位は、Ｎ－80°－Ｅであった。

カマドは、設置されなかったとして調査を行った。しかし、東壁中央の煙道状の掘り込みが、カマドの可能性が残った。

遺構の切り合い関係は、第453号土壙より新しかった。

１は、灰釉陶器の高台付皿である。口縁部が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第181号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

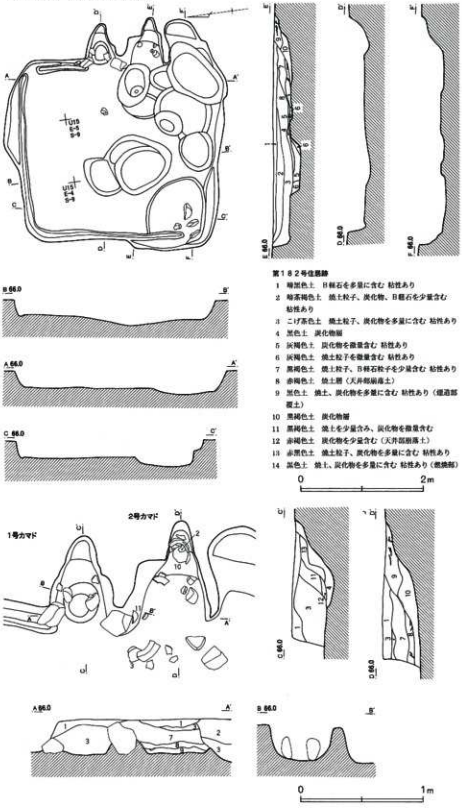
第182号住居跡（第306図・第307図）

Ｕ・Ｖ－15グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らだが、覆土の上面には火山灰が堆積し、確認が比較的容易であった。

住居跡の形状は、北壁と南東隅がやや張った、不整方形であった。規模は、長辺3.48ｍ・短辺2.87ｍ・深さ0.27ｍであった。カマドと南壁を除き、幅0.18ｍの壁溝を検出した。

住居跡の南側半分に、長径0.4ｍ～1.12

第306図　第182号住居跡



m、深さ0.08m～0.21mの楕円形の七基の土壙を検出した。これらの土壙は、重複していたことから、数度に亘って形成されたと判断した。

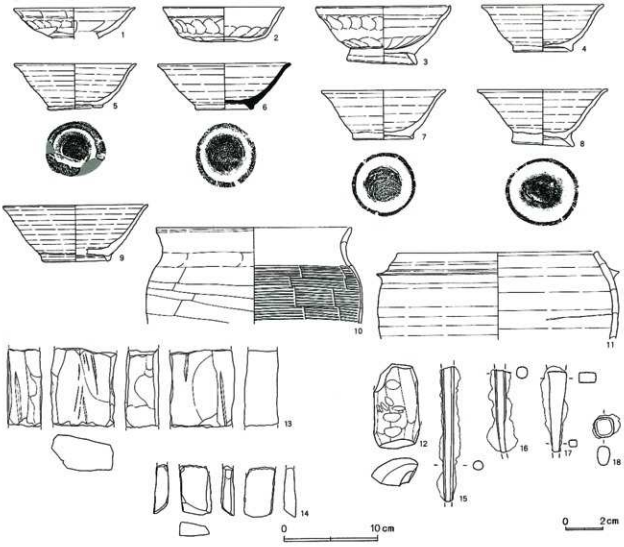
主軸方位は、N－100°－Eであった。

東壁に二基のカマドを並んで検出した。覆土の堆積状況から1・2号カマドとも、住居埋没時まで共用していたと推定した。

1号カマドは、東壁のやや北寄りに検出した。左袖は造らず、右袖は2号カマドと共有していた。焚き口部の両側に川原石が補強材として使用されていた。燃焼部中央には、円形の浅い掘り込みがみられた。この掘り込みの両側には、支脚の川原石が出土したため、二つ掛けカマドと推定した。燃焼部から煙道部には、緩やかな段をもって移行していた。

2号カマドの右袖は、地山を掘り残して造られていた。左袖は、1号カマドと共有していた。燃焼部底面は、

第307図　第182号住居跡出土遺物



浅く窪んでいた。燃焼部から煙道部は、段をもって移行していた。2号カマド右脇には、幅0.3m・床面からの高さ0.15mの半円形の小さな棚状施設を検出した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、2号カマド内から土師器の坏（2）・甕（10）が出土した。

1は、土師器の坏Bである。2は、土師器の坏AVである。3は、土師器の高台付坏Bである。1は底部が欠損している。

4から9は、高台付椀である。4・8・9は、HSである。5・7は、須恵器（NS）である。6は、須恵器（S）である。9は底部が欠損している。

10は、土師器の甕である。11は、須恵器（HS）の羽釜である。胴部中位以下が欠損している。

12は、土錘である。

13・14は、砥石である。

15から17は、鉄製品である。15・16は棒状鉄製品、17は釘の基部破片、18は鉄塊である。

以上、出土遺物から第182号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第183号住居跡（第308図）

U－15グリッドで確認した。周辺は、溝・土壙などが、比較的疎らにあった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.00m・短辺2.48m・深さ0.10mであった。住居跡の中央に不整楕円形の土壙を検出した。規模は、長径1.09m・深さ0.14mであった。

柱穴は、住居跡の北側に二基検出した。1号小穴は、径0.21m・深さ0.07mであった。2号小穴は、径0.31m・深さ0.15mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、土師器の坏AⅤである。底部が欠損している。

以上、出土遺物から第183号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第184号住居跡（第309図）

N－17グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らだが、砂利層が確認面のため、確認作業は困難であった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.10m・短辺2.61m・深さ0.20mであった。住居跡の北東隅に、径0.21m・深さ0.11mの小穴を一基検出した。

主軸方位は、N－103°－Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、検出できなかった。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、不整形に浅く掘り込まれていた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1から4は、土師器の坏である。1・4は、坏AⅣである。2から4は底部が欠損している。1は黒色の付着物が口縁部に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

5は、須恵器（NS）の椀である。

以上、出土遺物から第184号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第185号住居跡（第310図・第311図）

M・N－18グリッドで確認した。周辺の遺構は、疎らだが、砂利層が確認面のため、確認作業は困難であった。

第266表　第181号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	糸切	色調	残存	出土位置その他
1	高台付皿	K				6.2	D	普通		灰	10	

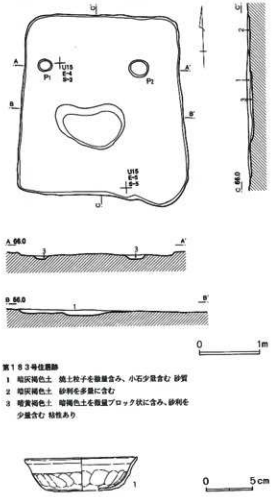
第267表　第182号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	糸切	色調	残存	出土位置その他
1	坏B	H	12.8				B, E, H	良好		赤橙	20	
2	坏AⅤ	H	12.7	3.6		6.2	B, C, D, E	普通		栗	30	
3	高台付坏B	H	14.1	6.2		7.1	B, D, E	不良		橙	70	
4	高台付椀	HS	12.7	5.0		5.9	B, C, E	良好		にぶい橙	50	
5	高台付椀	NS	12.8	5.2		5.5	B	普通		灰白	90	
6	高台付椀	S	13.8	4.8		5.7	B, E	良好		灰白	50	
7	高台付椀	NS	13.0	5.2		6.1	B, E	良好		褐灰	40	
8	高足高台付椀	HS	13.7	6.1		6.2	B, E, I	良好		黄灰	70	
9	高台付椀	HS	15.2	5.9		6.6	B, I	良好		にぶい黄橙	30	
10	甕AⅢa	H	20.6				B, E, H	良好		橙	70	
11	羽AⅡaイ	HS	21.2		2.2		C, E, H	良好		橙	25	

第268表　第182号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
12	橙	30	4.5			15.8	A1	Ⅷ	13	

第308図　第183号住居跡・出土遺物



住居跡の形状は、不整方形であった。規模は、長辺5.05m・短辺4.35m・深さ0.40であった。

主軸方位は、N－78°－Eであった。

カマドは北壁やや西寄りと、東壁中央に二基検出した。覆土の状況から、1号カマドは住居跡の埋没以前に破壊されていたと判断した。

1号カマドの袖は、破壊されていて不明であった。燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。

2号カマドの袖は、検出できなかった。しかし燃焼部の位置からは、造り付けカマドの袖が、住居跡内に延びていたと推定した。燃焼部の中央左寄りからは、川原石を使用した支脚が出土した。二つ掛けカマドと判断した。カマド前面から南東隅にかけては、凝灰岩の切石（14）や川原石などのカマドの構築材が多量に出土した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1から5は、土師器の坏である。1・2・5は、坏AⅣである。3は、坏AⅤである。4は、坏AⅥである。1・5は底部が欠損している。3は黒色の付着物が口縁部内面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

6は、須恵器（NS）の椀である。7・8は、須恵器（NS）の高台付椀である。

9・10は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

11は、須恵器（S）の短頸壺である。胴部下位以下が欠損している。

12は、須恵器（HS）の脚付釜の脚部である。

13は、凝灰岩の切石である。

以上、出土遺物から第185号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

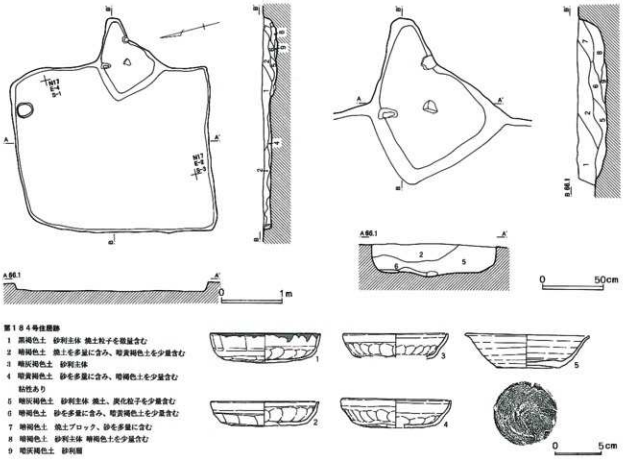
第269表　第183号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅴ	H	11.8	3.5		7.6	B, C, E	普通		暗橙	20	

第270表　第184号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.6	3.1		8.4	B, D, E	普通		橙	80	
2	皿	H	11.5	2.6		9.1	B, D, E	不良		橙	20	
3	坏 A	H	11.0				B, E	不良		暗橙	30	
4	坏 A Ⅳ	H	11.5	3.0		6.3	B, D, E, G	普通		黄褐	40	
5	椀	NS	12.9	3.5		6.6	B, D	良好	R	灰白	80	

第309図　第184号住居跡・出土遺物



第186号住居跡（第312図）

O・P－18・19グリッドで確認した。周辺は、溝・土壙・小穴などの遺構が、比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.01m・短辺3.19m・深さ0.50mであった。

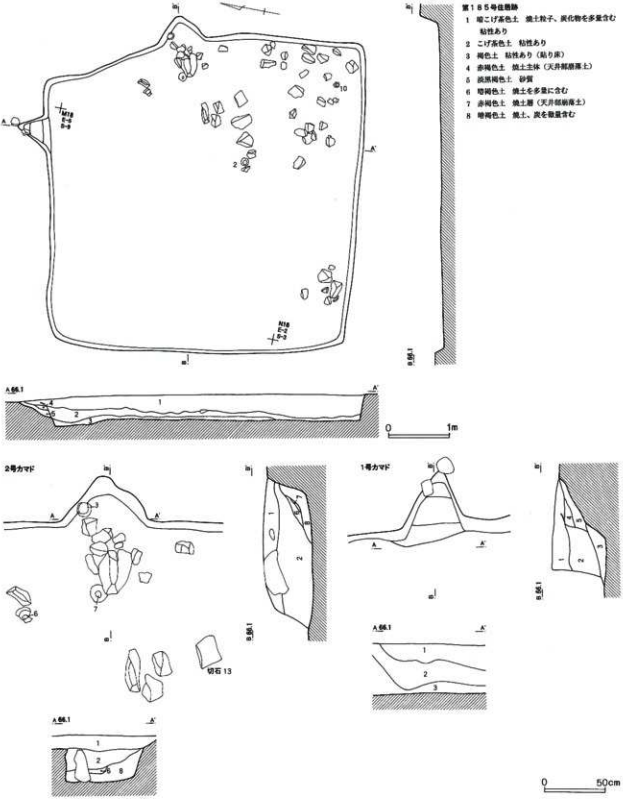
主軸方位は、N－94°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、非常に短く住居跡内に延びてい

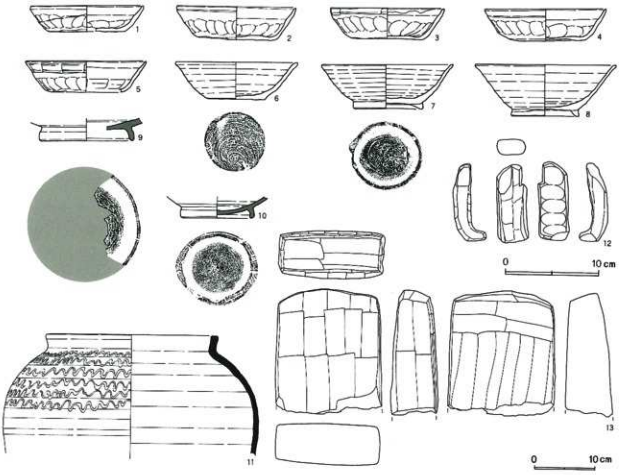
第271表　第185号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	機別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	調整	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.9	2.7		8.1	B, D, E	普通		黄橙	30	
2	坏 A Ⅳ	H	12.5	3.5		8.1	B, E, G	普通		淡黄灰	100	
3	坏 A Ⅴ	H	11.9	3.2		7.5	B, E, H	普通		黄褐	100	カマドA
4	坏 A Ⅵ	H	12.8	3.4		7.9	B, E, G, H	普通		暗橙	60	
5	坏 A Ⅳ	H	12.7	3.2			B, E, H	普通		黄橙	30	
6	椀	N S	12.7	3.9		6.1	B	良好	R	灰白	80	カマド
7	高台付椀	N S	13.9	4.7		7.0	B, G, I	良好	R	灰白	100	カマドA
8	高台付椀	N S	14.9	5.4		6.9	B, E, G	普通	R	灰白	40	
9	高台付椀	K				9.6	D	普通	R	灰白	20	
10	高台付椀	K				7.1	D	良好	R	灰白	100	
11	短頸壺	S	17.4				B	良好		青灰	20	
12	脚付壺	H S					B, E, H	普通		にぶい橙	80	

第310図　第185号住居跡



第311図　第185号住居跡出土遺物



第272表　第186号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	10.9	2.7		7.4	B, D, E	普通		黄褐	20	カマド
2	坏 A Ⅳ	H	12.1	2.5		8.2	B, D, E	普通		黄褐	20	
3	坏 A Ⅳ	H	12.9	2.6		9.0	B, D, E	普通		黄橙	40	
4	高台付皿	H S	13.7	2.9		6.0	B, E, I	良好	R	浅黄	90	カマド
5	高台付椀	K	19.7				B	良好	R	灰黄	10	
6	高台付椀	K				6.7	D	良好		淡黄灰	20	
7	甕 B Ⅰ a	H	19.7	25.2		4.0	B, D, E	良好		橙	90	カマド
8	甕 B Ⅲ a	H	18.9				B, D, E	普通		橙	20	
9	大甕	S					B	普通		青灰	5	

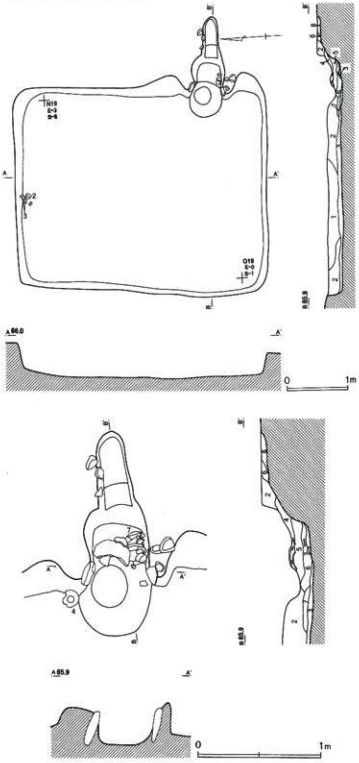
第273表　第186号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
10	浅黄橙	100	5.3	1.8	0.5	15.4	C 1	Ⅰa	162	

第274表　第187号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.4	3.2		7.2	B, D, E	普通		橙	70	カマド

第312図　第186号住居跡



第186号住居跡

1　暗褐色土　焼土を少量含み、砂利を多量に含む
2　暗褐色土　焼土を少量含み、大形礫を多量に含む
3　明黄褐色土　白色粒子を多量に含み、大形礫を少量含む
4　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含む　粘性あり（天井部崩落土）
5　暗褐色土　焼土、炭、砂を多量に含む
6　暗褐色土　焼土を多量に含む　粘性あり
7　黒色土　炭主体　焼土粒子を微量含む
8　暗褐色土　焼土、炭、砂を少量含む

た。両袖の先端に川原石が補強材として使用されていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形の浅い窪みがみられた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は、一旦緩やかに立ち上がり、その後水平に延びていた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（7）が出土し、北壁の際から土師器の坏（2）が出土した。

1から3は、土師器の坏AⅣである。底部が欠損している。

4は、須恵器（ＨＳ）の高台付皿である。

5・6は、灰釉陶器の高台付椀である。5は底部、6は口縁部が欠損している。

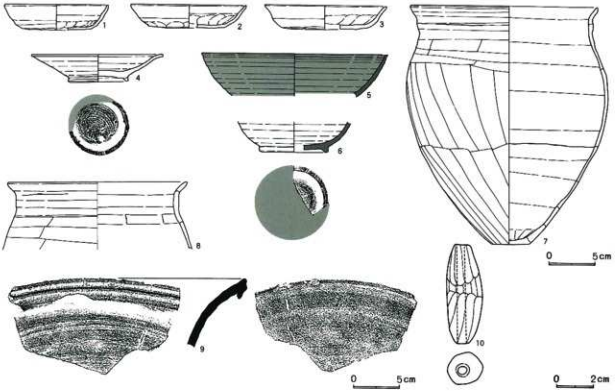
7・8は、土師器の甕である。8は胴部中位以下が欠損している。

9は、須恵器の大甕である。口縁部破片である。

10は、土錘である。

以上、出土遺物から第186号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第313図　第186号住居跡出土遺物



第187号住居跡（第313図・第314図）

N－19、O－19・20グリッドで確認した。周辺は、溝・土壙・小穴などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.35m・短辺2.56m・深さ0.14mであった。

主軸方位は、N－97°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から、住居跡内に短く延びていたと推定した。燃焼部は、不整楕円形の掘り込みがみられた。焚き口部から川原石が出土し、カマドの構築材と判断した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏（1）が出土した。

1は、土師器の坏AIVである。

2から4は、鉄製品である。2は刀子、3・4は板状鉄製品である。

以上、出土遺物から第187号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第188号住居跡（第315図・第316図）

O－19・20グリッドで確認した。周辺は、溝・土壙・掘立柱建物跡などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.73m・短辺3.10m・深さ0.44mであった。

主軸方位は、N－103°－Eであった。

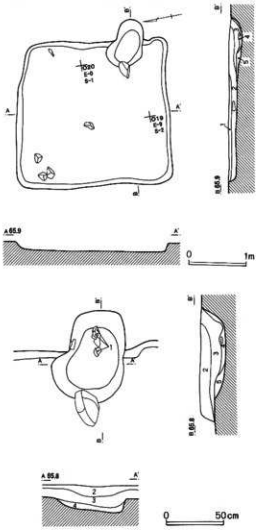
カマドは、四基検出した。覆土の状況から1・3・4号カマドは、住居跡の埋没まで共用していたと判断した。

1号カマドは、北壁の北東寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の両側には、川原石が補強材として使用されていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形に極く浅く窪んでいた。燃焼部と煙道部の境には、段はみられなかった。煙道部は、緩やかに立ち上がっていた。

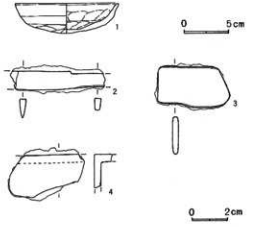
2号カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。3号カマドに大半が破壊され、煙道部のみを検出したため、詳細は不明であった。

3号カマドは、東壁の中央で検出した。2号カマド

第314図　第187号住居跡・出土遺物



第187号住居跡
1　暗褐色土　粘土、炭微量含む、白色粒子、砂を少量含む
2　暗黄褐色土　粘土微量含む、白色粒子、砂礫を少量含む
3　暗褐色土　粘土、砂を多量に含む
4　暗褐色土　粘土を微量含む
5　黒褐色土　粘土、炭化物を少量含む　粘性あり



を作り替えたと推定した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に短く延びていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形の浅い掘り込みがみられた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は短く、煙り出し部は、垂直に立ち上がっていた。カマド周辺から川原石が多量に出土した。カマドの構築材であろう。

4号カマドは、東壁の南東寄りに検出した。小形のカマドであった。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に短く延びていた。燃焼部は、円形に掘り込まれ、焼土が多量に出土した。燃焼部から煙道部へは、段をもって移行していた。

貯蔵穴は、4号カマドの右脇南東隅に検出した。形状は、円形で規模は、径0・59m・深さ0・2mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、1号カマドの前面から須恵器の高台付椀（5）が、3号カマド内から須恵器の高台付椀（6）が出土した。4号カマド内から土師器の甕（15・16）が出土し、貯蔵穴内から須恵器の高台付椀（4）が出土した。

1は、土師器の坏Bである。底部が欠損している。

2から4は、須恵器（NS）の高台付椀である。5・6は、須恵器（HS）の高台付椀である。6は底部が欠損している。5は黒色の付着物が口縁部内面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

7・8は、須恵器（HS）の高台付椀である。

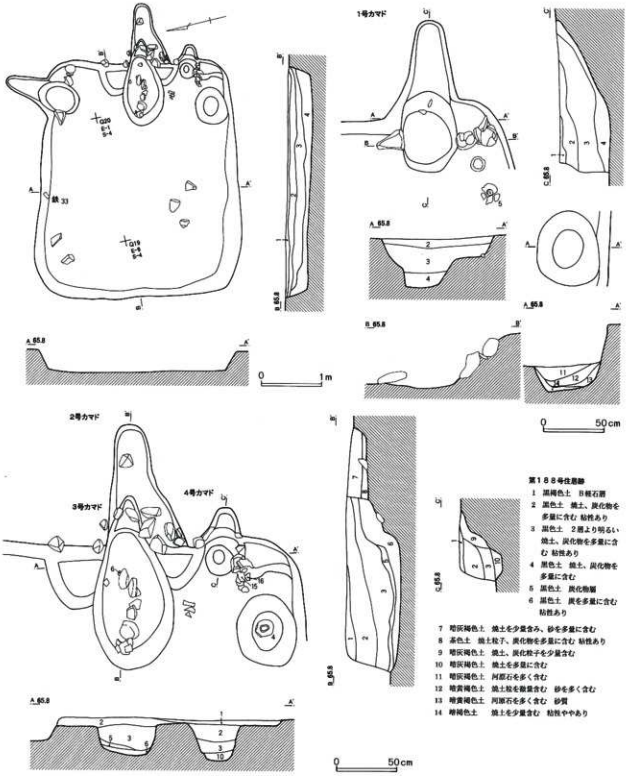
9から14は、灰釉陶器である。9・10は、高台付椀である。11は、高台付皿である。12は、三足盤である。13は、緑釉陶器の高台付椀である。14は、高台付大椀である。9から12は底部が欠損している。13は体部破片である。14は口縁部のみである。

15・16は、土師器の甕である。15は胴部中位以下、16は底部が欠損している。

17・18は、灰釉陶器の長頸壺である。17は口縁部のみ、18は底部のみである。

19は、須恵器（S）の大甕である。口縁部破片であ

第315図　第188号住居跡



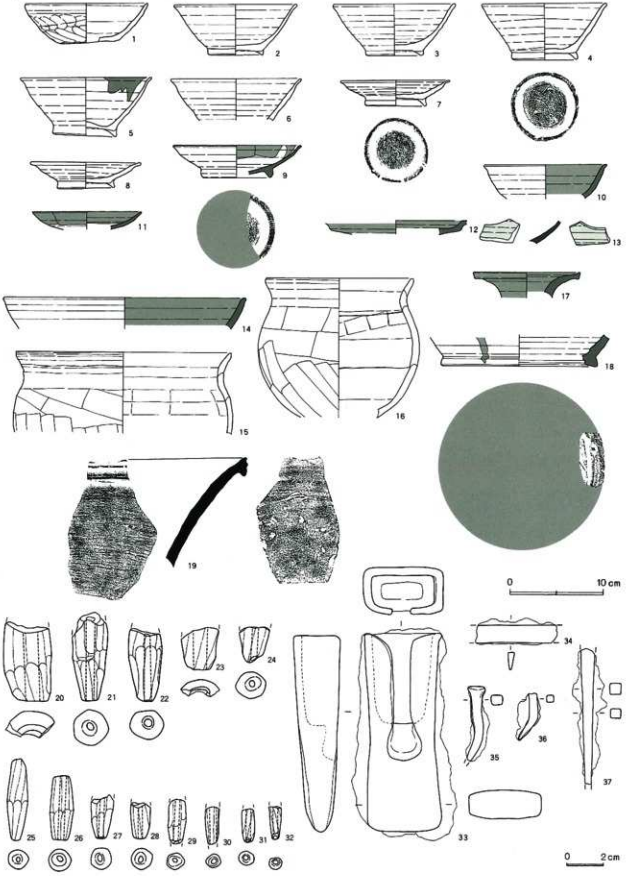
る。

20から32は、土錘である。

33から37は、鉄製品である。33は鉄斧、34は刀子の刃部破片、35・36は釘、37は釘の基部と考えられる破片である。

以上、出土遺物から第188号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ

第316図　第188号住居跡出土遺物



期に位置付けたい。

第189号住居跡（第317図・第318図）

O－20、P－19・20グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.96m・短辺3.26m・深さ0.13mであった。

主軸方位は、N－106°－Eであった。

カマドは、東壁の南壁寄りに検出した。カマドは残存状況が悪く、不明な点が多かった。袖は、地山を掘り残して造り、非常に短く住居跡内に延びていた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼部と煙道部の境には、段がなく、底面は、燃焼部から煙道部まで水

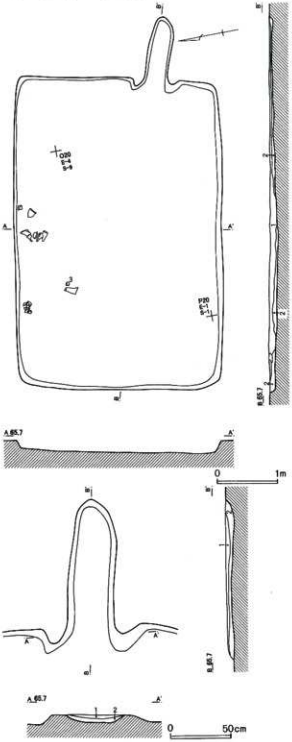
第275表　第188号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	穿孔	色調	残存	出土位置その他
1	坏B	H	13.0	4.2		5.6	B, D, E	普通		黄橙	20	
2	高台付椀	NS	12.8	5.3		5.6	B, E, I	良好	R	灰黄	40	カマドA。フク土
3	高台付椀	NS	12.9	5.5		5.6	B	良好	R	灰白	40	
4	高台付椀	NS	13.0	6.0		6.5	B, E, G	良好	R	黄灰	95	
5	高台付椀	NS	13.8	6.1		6.5	B, E	良好	R	灰	75	カマドB
6	高台付椀	HS	13.8				B, E, I	良好	R	にぶい橙	20	カマドA
7	高台付皿	HS	11.4	2.7		6.1	B, E, I	良好	R	褐灰	100	
8	高台付皿	HS	11.5	2.7		5.7	B, I	良好	R	外－灰白。内－灰褐	70	
9	高台付椀	K				7.0	B	良好	R	灰白	50	貯穴
10	高台付椀	K	12.8				B	良好	R	灰白	10	
11	高台付皿	K	11.5				B	良好	R	灰白	10	カマドA。フク土
12	三足盤	K					B, D	良好		灰白	3	フク土
13	高台付椀	M					B, D	普通		淡緑	5	
14	高台付椀	K	25.5				B, D	良好		外－灰白。内－オリーブ灰	5	
15	甕BⅢc	H	22.8				B, E, H	普通		にぶい橙	15	カマドD
16	台付甕	H	15.5				B, E, K	良好		浅黄橙	30	カマドD
17	長頸壺	K	11.2				B, D	良好	R	外－オリーブ灰。内－灰白	25	カマドA．フク土
18	長頸壺	K				16.3	D	良好		灰白	5	
19	大甕	S					B	普通		青灰	5	

第276表　第188号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
20	褐灰	20				13.7	A 1	Ⅶ	14	
21	橙	60		1.8	0.4	14.0	C 1	Ⅲa	163	
22	黄橙	60		1.8	0.4	9.7	C 1	Ⅱa	164	
23	黄橙	10				2.7	B 1	Ⅶ	61	
24	橙	20		1.6	0.3	2.8	C 1	Ⅳb	165	
25	浅黄橙	100	4.3	0.6	0.2	4.0	C 2	Ⅰa	417	
26	橙	100	3.4	1.2	0.3	4.9	C 2	Ⅰa	418	
27	灰黄	30		1.1	0.3	2.0	C 2	Ⅲa	419	
28	灰黄	20		1.2	0.3	1.9	C 2	Ⅲa	420	
29	橙	30		0.8	0.2	1.9	C 2	Ⅷ	421	
30	にぶい褐	30		0.8	0.3	0.9	C 3	Ⅷ	642	
31	橙	20				0.7	C 3	Ⅲb	643	
32	橙	10				0.4	C 3	Ⅳb	644	

第317図　第189号住居跡



第189号住居跡
1　暗褐色土　焼土、炭化物を多量に含み、砂粒を少量含む
2　暗黄褐色土

平であった。

遺構の切り合い関係は、第52号掘立柱建物跡・第618号土壙より新しかった。

1は、土師器の坏ANである。

2は、須恵器（ＨＳ）の椀である。底部外面に墨書「南」がみられる。3は、須恵器（S）の高台付椀である。底部のみである。

4は、灰釉陶器の高台付椀である。5から7は、灰釉陶器の高台付皿である。4・6・7は底部のみである。

8は、須恵器（ＮＳ）の蓋である。口縁部のみである。

9から14は、長頸壺である。12は須恵器（ＨＳ）、他は灰釉陶器である。9は口縁部のみである。10・12は口縁部と胴部中位以下が欠損している。11は頸部のみ、13・14は底部のみである。

15は、須恵器（S）の甕である。16は、灰釉陶器の大甕である。17は、須恵器（S）の大甕である。15から17は口縁部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第189号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第190号住居跡（第319図）

O・P－16・17グリッドで確認した。周辺は、住居跡・掘立柱建物跡・小穴などの遺構が比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.88ｍ・短辺3.40ｍ・深さ0.48ｍであった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

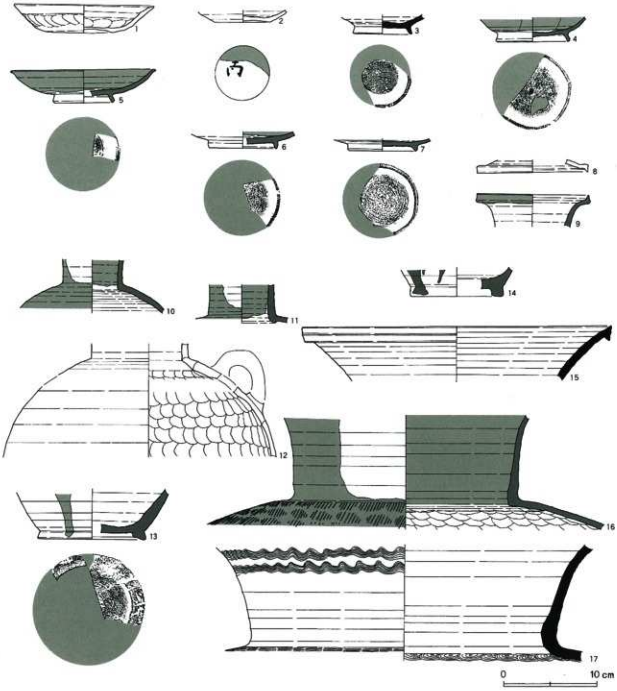
カマドは、検出できなかった。

遺構の切り合い関係は第191号住居跡より新しかった。

図示できるほどの遺物は、出土していない。

以上、遺構の重複関係等から第190号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第318図　第189号住居跡出土遺物



第191号住居跡（第320図）

O・P－16・17グリッドで確認した。周辺は、住居跡・掘立柱建物跡・小穴などの遺構が比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認に手間取った。

住居跡の北東隅が第190号住居跡に破壊されていた。形状は、長方形であった。規模は、長辺5.10m・短辺3.07m・深さ0.20mであった。

主軸方位は、N－88°－Eであった。

カマドは、東壁やや南寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から住居跡内に長く延びていたと推定した。焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形の浅い掘り込みがみられた。焚き口部からは、川原石がまとまって出土した。カマドの構築材であろう。

第277表　第189号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	14.8	3.0		7.2	D, E	普通		淡灰黒	50	
2	椀	HS					B, E, H					
3	高台付椀	S				5.8	B	良好	L	褐灰	20	
4	高台付椀	K				7.5	D	良好	R	灰白	60	
5	高台付皿	K	14.9	3.5		5.9	B, D	良好	R	灰白	10	
6	高台付皿	K				7.1	B, D	良好	R	灰白	25	
7	高台付皿	K				7.0	B, D, K	良好	R	灰白	50	
8	壺	NS	11.7				B, G	普通		灰白	5	
9	長頸壺	K	11.9				B, D	良好	R	灰	25	
10	長頸壺	K					B, D	良好		外－オリーブ灰。内－灰白	10	
11	長頸壺	K					B, D	良好		灰	15	
12	把手付長頸壺	HS					B, C, F, H	普通		橙	5	
13	長頸壺	K				11.3	B, D	良好	R	灰白	30	
14	長頸壺	K				9.6	B, D	良好	L	灰白	40	
15	大甕	S	32.4				B, G	普通		青灰	20	
16	大甕	K					B, D	良好		灰白	10	
17	大甕	S					B, K	良好		灰白	5	

遺構の切り合い関係は、第190号住居跡より古かった。

遺物は、カマド周辺から土師器の坏（1・5・6・7）、須恵器の高台付椀（9）が出土し、住居跡の南西で土師器の坏（2）が出土した。

1から7は、土師器の坏である。1・3は、坏AⅣである。2・5は、坏AⅥである。6・7は、坏Bである。8は、皿である。4・8は底部、5は口縁部が欠損している。

9は、須恵器（HS）の高台付椀である。10は、須恵器（NS）の高台付椀である。11は、須恵器（NS）の高台付皿である。

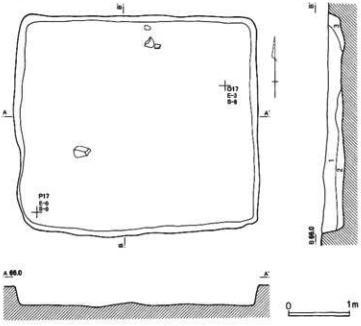
12は、灰釉陶器の高台付皿である。13から15は、灰釉陶器の高台付椀である。13は口縁部が欠損している。14・15は底部のみである。

16は、土師器の甕である。脚部のみである。

17は、須恵器（S）の壺である。脚部中位以下が欠損している。

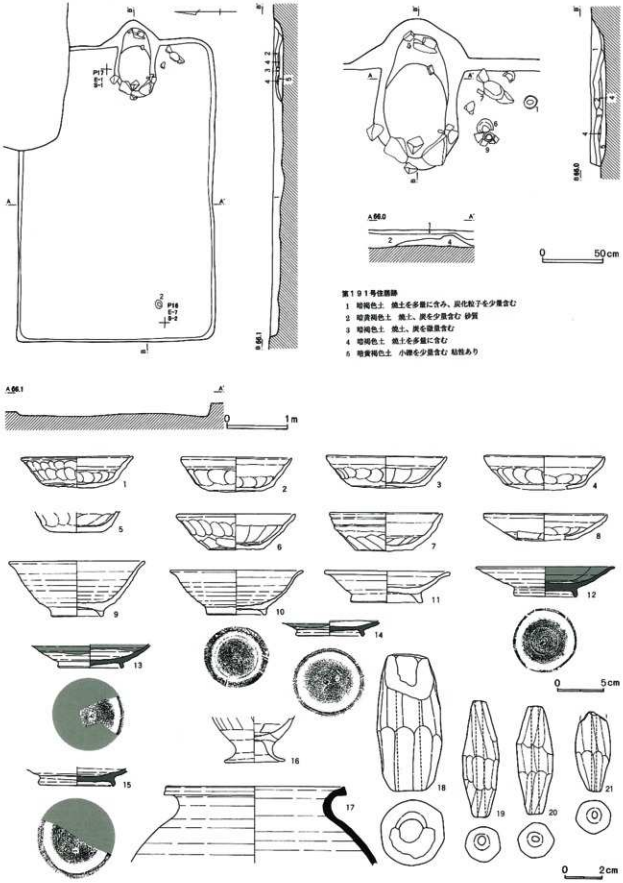
18から21は、土錘である。

第319図　第190号住居跡



第190号住居跡
1　暗灰褐色土　砂利主体 暗褐色土を少量含む
2　暗褐色土　粘性がややある微土粒子を微量含み、砂利を多量に含む
3　暗灰褐色土　砂利層

第320図　第191号住居跡・出土遺物



以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第191号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第192号住居跡（第321図・第322図）

P－Q－18・19グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土壙・小穴などの遺構が激しく重複し、覆土の状況も類似していたため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.23m・短辺3.78m・深さ0.20mであった。

主軸方位は、N－10°－Wであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。カマド部分の残存状況が悪く、構造など不明な点が多かった。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部から燃焼部にかけて底面に、小さな凹凸がみられた。しかし掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第193号住居跡より古かった。

遺物は、住居跡の南西から須恵器の甕（12）が出土した。

1・2は、土師器の坏AⅥである。1は底部が欠損している。

3は、須恵器（NS）の椀である。4・5は、高台付椀である。

6は、灰釉陶器の高台付椀である。7は、灰釉陶器の高台付皿である。6・7は底部が欠損している。

8は、須恵器（NS）の甕である。12は、須恵器の大甕である。8は底部のみである。12は口縁部破片である。

9は、灰釉陶器の手付瓶である。10は、灰釉陶器の長頸壺である。9は底部のみ、10は頸部のみである。

11は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第192号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

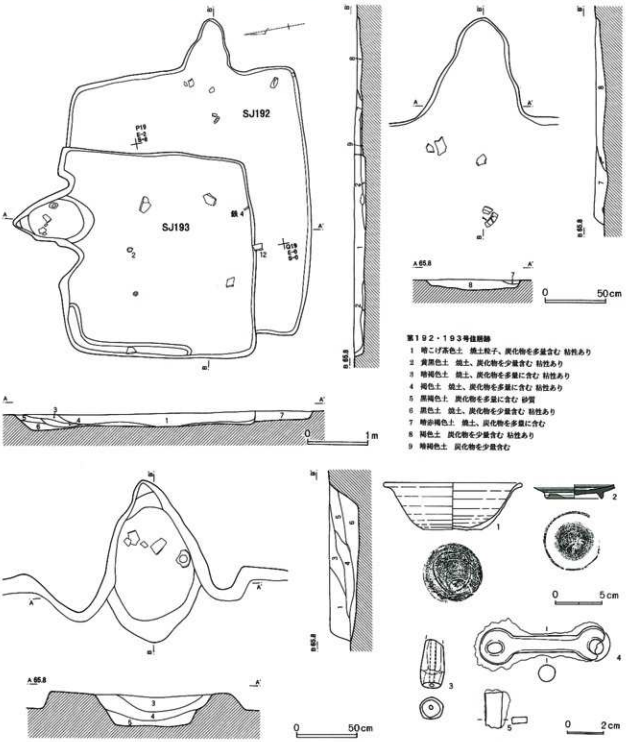
第278表　第191号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.7	3.2		6.2	B, D, H	良好		淡黄	100	カマド
2	坏 A Ⅵ	H	11.7	3.6		5.9	B, E	普通		淡黄褐	100	
3	坏 A Ⅳ	H	12.7	3.4		7.6	B, E	普通		明橙	30	
4	坏 A	H	12.7	3.5		7.0	B, C, E	普通		黄褐	30	
5	坏 A Ⅵ	H				5.4	B, D, E	普通		黄褐	20	
6	坏 B Ⅴ	H	12.4	3.7		5.9	B, D, E	普通		淡黄橙	100	カマド
7	坏 B Ⅱ	H	11.9	4.1		6.1	C, E, G	良好		暗黄褐	60	カマド
8	甕	H	13.0	2.8		6.1	B, D, E	普通		黄褐	30	
9	高台付椀	H S	14.0	5.8		5.1	C, E, I	良好	R	にぶい黄橙	70	カマド
10	高台付椀	N S	13.8	4.7		5.9	B, E, I	良好	R	灰白	50	
11	高台付皿	N S	13.1	3.4		7.3	B, E, I	普通	R	灰黄	40	
12	高台付皿	K	15.0	3.17		6.1	B	普通		灰白	40	
13	高台付椀	K				6.7	B	良好		灰白	20	
14	高台付椀	K				6.8	B, D	良好		淡灰白	20	
15	高台付椀	K				7.7	B	良好		暗灰	20	
16	台付甕	H				6.0	D, E	良好		褐灰	60	フク土
17	壺	S	13.8				B, G, K	良好		青灰	20	

第279表　第191号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
18	橙	80	7.3	3.4		77.5	A 1	Ⅰc	15	
19	浅黄橙	100	6.1	1.8	0.5	19.0	C 1	Ⅰa	166	
20	浅黄橙	100	5.7	2.0	0.4	15.5	C 1	Ⅰa	167	
21	橙	70		1.9	0.4	12.4	C 1	Ⅱa	168	

第321図　第192・193号住居跡・第193号住居跡出土遺物



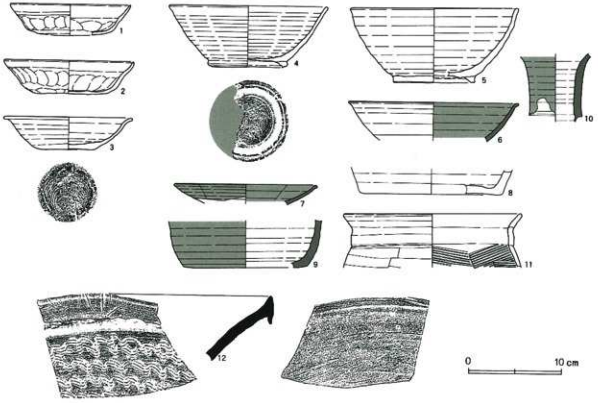
第192・193号住居跡

1　暗こげ茶色土　焼土粒子、炭化物を多量含む　粘性あり
2　黄黒色土　焼土、炭化物を少量含む　粘性あり
3　暗褐色土　焼土、炭化物を多量に含む　粘性あり
4　褐色土　焼土、炭化物を多量に含む　粘性あり
5　黒褐色土　炭化物を多量に含む　砂質
6　黒色土　焼土、炭化物を少量含む　粘性あり
7　暗赤褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
8　褐色土　炭化物を少量含む　粘性あり
9　暗褐色土　炭化物を少量含む

第280表　第193号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
3	にぶい橙	50		1.2	0.2	4.0	C1	端	169	

第322図　第192号住居跡出土遺物



第281表　第192号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪鐘	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	12.7	3.3		7.0	B, E	普通		淡黄橙	40	
2	坏 A Ⅵ	H	13.7	3.5		8.0	B, E	普通		黄橙	50	
3	椀	N S	13.4	3.4		5.6	B, E, I	良好	R	灰白	60	
4	高台付椀	N S	16.7	6.5		7.3	B, E	普通	R	灰白	60	
5	高台付椀	N S	17.7	7.9		8.5	B, E, I	良好	R	灰白	30	
6	高台付椀	K	17.9				B, D	良好		灰白	10	
7	高台付皿	K	14.9				D	良好	R	オリーブ灰	10	
8	甕	N S				14.0	B, H	普通		灰白	25	
9	手付瓶	K				10.7	D	良好		外ーオリーブ灰。内ー灰白	5	
10	長頸壺	K					B, D	普通		灰白		
11	甕 B Ⅲ a	H	18.8				C, H	良好		にぶい橙	25	
12	大甕	S					B	普通		青灰	5	

第282表　第193号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪鐘	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	H S	14.5				B, C, I	良好	R	灰白	70	
2	高台付皿	K				5.8	B, D	良好	R	外ー灰白。内ーオリーブ灰	90	

第193号住居跡（第321図）

P－18・19グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土壙・小穴などの遺構が激しく重複し、覆土の状況も類似していたため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.23m・短辺3.13m・深さ0.37mであった。北西隅から西壁にかけて幅0.2mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－14°－Eであった。

カマドは、北壁東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に短く延びていた。燃焼部は、楕円形に浅く窪んでいた。燃焼部から煙道部へは小さな段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第192号住居跡より新しかった。

遺物は、西壁から鉄製品（4）が出土した。

1は、須恵器（HS）の高台付皿である。

2は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

3は、土錘である。

4・5は、鉄製品である。4は轡の銜と考えられる。5は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第193号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第194号住居跡（第323図・第324図）

P・Q－20グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土壙・小穴などの遺構が密集し、砂利層が確認面であったため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.31m・短辺3.34m・深さ0.30mであった。覆土中に、大形の川原石を多量に混入していた。

主軸方位は、N－100°－Eであった。

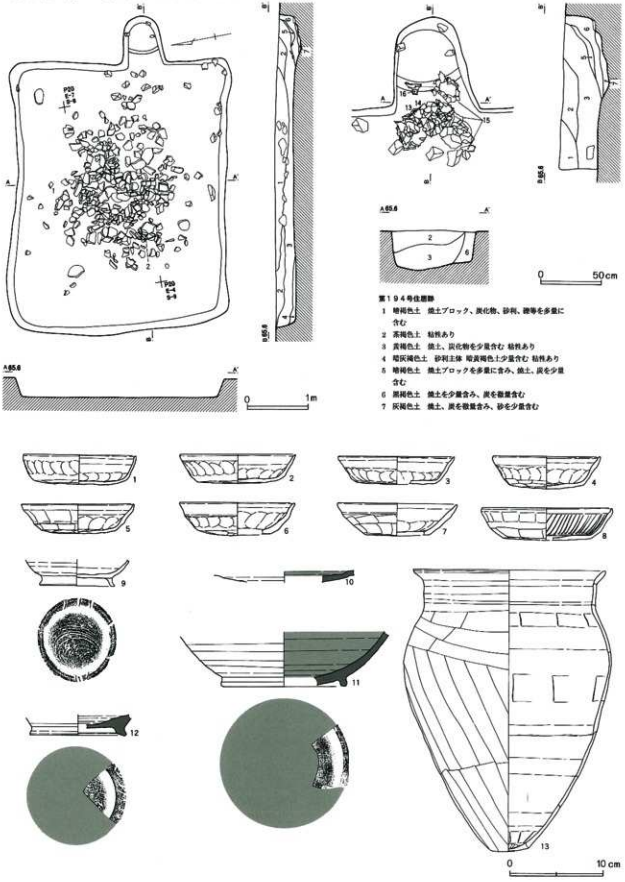
カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、検出できず、当初から造られなかったと判断した。焚き口部から土師器の甕（13・14）が入れ子状に出土し、天井部の補強材として使用していたと推定した。燃焼部の奥は円形に掘り込まれていた。燃焼部から煙道部へは、階段状に段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第617・619号土壙より古か

第283表　第194号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.1		7.5	B, D, E, H	普通		淡黄褐	50	
2	坏 A Ⅳ	H	12.3	3.1		8.2	B, C, D, E	普通		淡黄橙	90	
3	坏 A	H	12.3	2.9		8.3	E, G, H	普通		橙	20	
4	坏 A Ⅱ	H	11.3	3.5		8.0	B, D, E	普通		暗黄橙	60	
5	坏 A Ⅱ	H	11.9	3.1		7.8	B, E, G	普通		黄褐	70	
6	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.5		6.8	B, D, E	普通		黄褐	20	
7	坏 B Ⅱ	H	12.7	3.4		6.8	B, E, H	普通		淡橙	20	
8	坏（暗文）	H	13.7	3.4		9.3	B	普通		黄橙	50	
9	高台付椀	NS				7.8	B, D, E, I	良好	R	灰白	30	カマド
10	段皿	K					B, D	良好		外－灰白。内－オリーブ灰	5	
11	高台付椀	K				13.0	D	良好	L	外－灰白。内－オリーブ灰	15	
12	長頸壺	K				10.1	B, D	良好		灰白	15	
13	甕 B Ⅱ b	H	20.2	19.9		4.0	A, B, E	良好		橙	90	カマド
14	土師甕 B Ⅱ a	H	19.5				B, E	良好		明暗褐		口－100。胴－60。カマド
14	甕 B Ⅱ b	H				4.0	B, E	良好		明暗褐	80	カマド
15	甕 B Ⅱ b	H	20.5				B, C, E	良好		橙	60	カマド
16	壺 G	S				4.4	B	良好		灰白	100	カマド

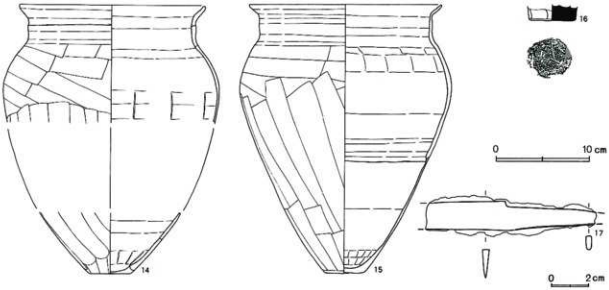
第323図　第194号住居跡・出土遺物（1）



第194号住居跡

1　暗褐色土　焼土ブロック、炭化物、砂利、礫等を多量に含む
2　茶褐色土　粘性あり
3　黄褐色土　焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
4　暗灰褐色土　砂利主体 暗黄褐色土少量含む 粘性あり
5　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含み、焼土、炭を少量含む
6　黒褐色土　焼土を少量含み、炭を微量含む
7　灰褐色土　焼土、炭を微量含み、砂を少量含む

第324図　第194号住居跡出土遺物（2）



った。

遺物は、カマド内から土師器の甕（15）、須恵器の壺G（16）が出土した。

1から8は、土師器の坏である。1・2・6は、坏AⅣである。4・5は、坏AⅡである。7は、坏BⅡである。8は、内面に放射状暗文を施す坏である。3・6から8は底部が欠損している。

9は、須恵器（NS）の高台付椀である。底部のみである。

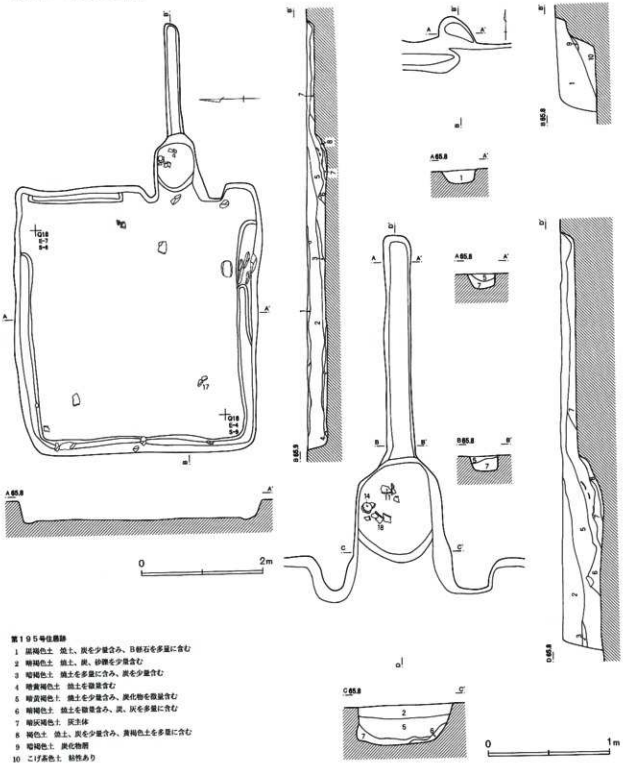
10から12は、灰釉陶器である。10は、段皿である。11は、高台付椀である。12は、長頸壺である。10は体部のみ、12は底部のみである。11は口縁部と底部が欠損している。

13から15は、土師器の甕である。16は、須恵器（S）

第284表　第195号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.9	3.3		8.0	B, C, D, E	普通		暗橙	60	
2	坏 A Ⅳ	H	12.7	3.2		7.6	B, C, D, E	良好		黄褐	30	
3	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.3		7.3	B, D, E	普通		暗黄橙	40	
4	坏 A Ⅱ	H	11.2	3.0		7.8	B, D, E	普通		淡黄茶	60	カマドB
5	坏 A Ⅴ	H	13.4	3.8		6.1	B, C, E	普通		淡橙	80	
6	坏（暗文）	H	14.0	4.1		9.3	B, D, E	普通		黄褐	40	
7	坏（暗文）	H	16.7	5.1		9.4	B, D, E, G	不良		黄橙	30	カマドA
8	皿	H	13.4	3.1		8.0	B, D, E	不良		淡茶橙	50	
9	椀	S	11.8	3.6		6.4	B	良好	R	灰	25	
10	高台付椀	NS	16.0	6.3		8.8	B, C, E, I	良好	R	灰白	20	
11	高台付椀	HS	14.6				B, C, E, G, I	普通	R	にぶい黄橙 灰黄	30	カマドB
12	高台付椀	HS				7.7	B, I	普通	R	にぶい黄橙	20	カマドA
13	高台付椀	NS				8.8	B, D	良好	R	灰白	20	
14	高台付椀	NS				7.5	B, C, I	良好	R	灰白	30	カマドB
15	壺	NS	15.6				B	良好	R	灰白	5	
16	壺	S					B, D	良好	R	灰白	20	
17	甕 B Ⅱ a	H	18.8				D, E, H	良好		浅黄橙	25	
18	甕 B Ⅲ c	H	19.4				B, E, H	良好		橙	30	カマドB

第325図　第195号住居跡



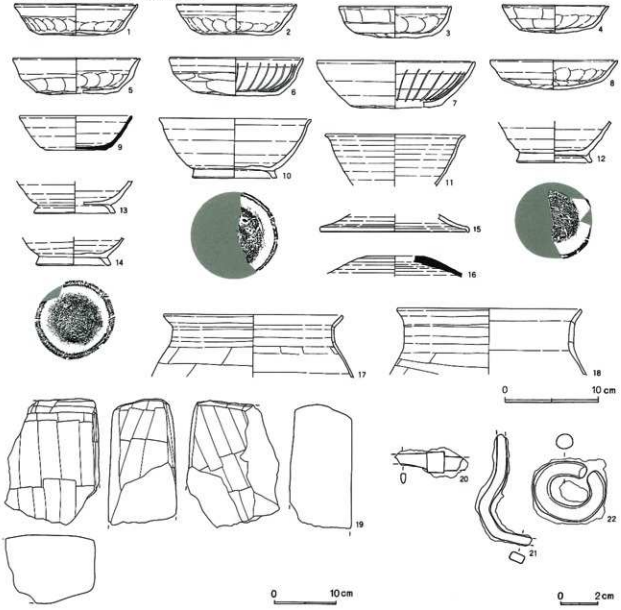
第195号住居跡
1　黒褐色土　焼土、炭を少量含み、B軽石を多量に含む
2　暗褐色土　焼土、炭、砂礫を少量含む
3　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭を少量含む
4　暗黄褐色土　焼土を微量含む
5　暗黄褐色土　焼土を少量含み、炭化物を微量含む
6　暗褐色土　焼土を微量含み、炭、灰を多量に含む
7　暗灰褐色土　灰主体
8　褐色土　焼土、炭を少量含み、黄褐色土を多量に含む
9　暗褐色土　炭化物層
10　こげ茶色土　粘性あり

のいわゆる壺Gである。14は胴部中位が欠損している。16は底部のみである。

17は、鉄製品の刀子である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第194号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第326図　第195号住居跡出土遺物



第195号住居跡（第325図・第326図）

Q－18・19グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土壙などの遺構は密集していたが、覆土上面に堆積した火山灰から比較的容易に確認できた。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺4.20ｍ・短辺3.92ｍ・深さ0.30ｍであった。カマドと住居跡の北東隅を除き、幅0.25ｍの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－89°－Eであった。

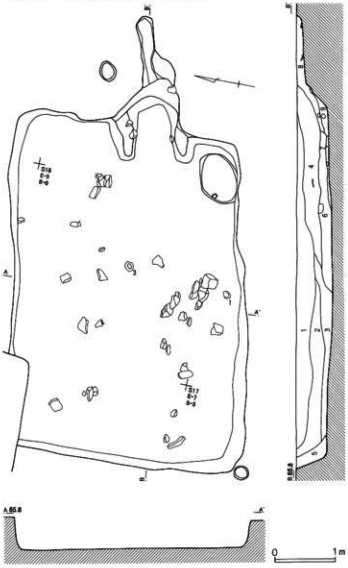
カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、非常に短く住居跡内に延びていた。燃焼部は、円形に浅く窪んでいた。燃焼部から煙道部へは、段をもって移行していた。煙道部は、長さ1.79ｍと非常に細長く、底面は水平であった。煙り出し部は、垂直に立ち上がっていた。

遺構の切り合い関係は、第46号掘立柱建物跡・第585号土壙より古かった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（11・14）、土師器の甕（18）が出土し、住居跡の南西に土師器の甕（17）が出土した。

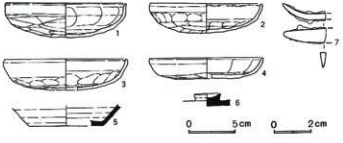
1から7は、土師器の坏である。1から3は、坏A

第327図　第196号住居跡・出土遺物



第196号住居跡

1　暗褐色土　焼土を微量含み、小礫、白色粒子を多量含む
2　暗褐色土　焼土を微量含み、灰白色粘土ブロック、小礫を少量含む　粘性あり
3　暗灰褐色土　焼土、炭、砂を少量含み、灰白色粘土ブロックを多量に含む
4　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭、小礫を少量含む
5　暗褐色土　礫を微量含む
6　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭、灰白色粘土を少量含む　粘性あり。
7　灰褐色土　灰色粘土主体　焼土、炭を少量含む（貼り床）
8　赤褐色土　焼土層（天井崩壊土）
9　暗赤褐色土　焼土粒子、炭化物を多量に含む（燃焼部にたまった灰層）
10　暗褐色土　焼土、炭を少量含み、黄灰色粘土を微量含む
11　暗灰褐色土　焼土、炭、灰色粘土を少量含み、小礫を多量に含む



N′である。4は、坏AⅡである。5は、坏AⅤである。6・7は、暗文土器である。8は、土師器の皿である。5・7は底部が欠損している。

9は、須恵器（S）の椀である。10から14は、高台付椀である。10・13から14は、須恵器（NS）である。11・12は、須恵器（HS）である。15は、須恵器（NS）の蓋である。16は、須恵器（S）の蓋である。11は底部、12から14は口縁部が欠損している。15は天井部、16は口縁部と天井部が欠損している。

17・18は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

19は、凝灰岩の切石である。

20から22は、鉄製品である。20は刀子、21は棒状鉄製品、22は鉄環である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第195号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第196号住居跡（第327図・第328図）

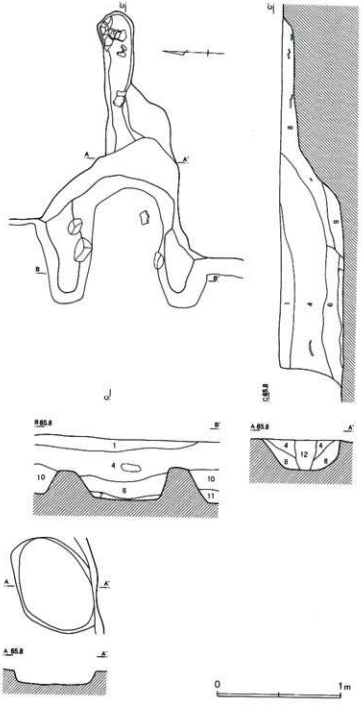
R・S－17・18グリッドで確認した。周辺は、住居跡・小穴などの遺構がみられたが、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、不整長方形であった。規模は、長辺5.40m・短辺3.74m・深さ0.55mであった。

主軸方位は、N－80°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内に延びていた。燃焼部は、不整形で、底面の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部へは、緩やかな段をもって移行していた。煙道部は1.35mと細長く、煙り出し部は、急な傾斜で立ち上がっていた。

第328図　第196号住居跡カマド・貯蔵穴



貯蔵穴は、カマド右脇に検出した。形状は、楕円形で規模は、長径0.89m・短径0.62m・深さ0.15mであった。

遺構の切り合い関係は、第197号住居跡より古かった。

遺物は、住居跡の中央から土師器坏（3）が出土した。

1から4は、土師器の坏AⅣである。3・4は底部が欠損している。

5は、須恵器（S）の椀である。6は、須恵器（S）の蓋である。5は底部のみである。6は紐のみである。

7は、鉄製品の刀子（切先）である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第196号竪穴式住居跡を中堀Ⅱ期に位置付けたい。

第197号住居跡（第329図・第330図・第331図・第332図・第333図・第334図）

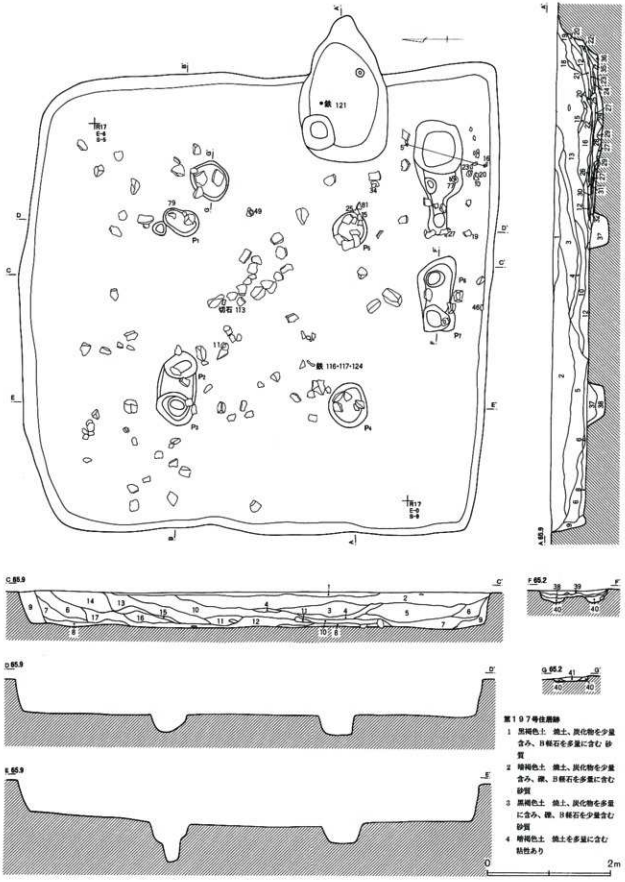
R－16・17、S－17グリッドで確認した。周辺は、住居跡・掘立柱建物跡・土壙などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺7.44m・短辺7.18m・深さ0.80mと大形の住居跡であった。小穴は、七基検出した。このうち1号小穴～5号小穴が、住居跡の主柱穴、6・7号小穴は入口施設と判断した。また1号小穴に径0.67m・深さ0.08mの円形の土壙を検出した。そのほか住居跡内から散乱した状況で大形の川原石が出土した。

第285表　第196号住居跡出土遺物観察表

番号	器種			種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A	Ⅳ	H	12.7	3.6		5.9	B, C, E, H	普通		黄褐	100	
2	坏	A	Ⅳ	H	11.8	3.1		8.5	B, D, E	普通		淡黄褐	60	
3	坏	A	Ⅳ	H	12.9	3.3		8.6	B, C, E	普通		黄橙	90	
4	坏	A	Ⅳ	H	12.0	2.2		6.9	B, C, D, E	不良		黄褐	20	
5	椀			S				7.9	B, J	良好	R	灰	5	
6	蓋			S					B	良好	R	黄灰	5	

第286表　第197号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.6	4.0		6.3	B, C	普通		黄橙	90	カマド
2	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.8		6.5	B, C, E	普通		淡黄橙	40	
3	坏 A Ⅵ	H	12.1	3.6		7.4	B, E, H	良好		浅黄橙	100	カマドNo.2
4	坏 A	H	12.2				B, D, E	普通		黄褐	20	
5	坏 A Ⅳ	H	11.8	4.0		6.0	B, C, E	普通		淡黄橙	50	
6	坏 A Ⅵ	H	11.9	4.1		6.4	B, D, E	良好		黄褐	60	
7	坏 A Ⅵ	H	11.0	4.0		7.0	B, D, E	普通		黄橙	40	貯穴
8	坏 A Ⅵ	H	12.6	3.8		6.9	B, E, H	普通		黄褐	50	P3
9	坏 A Ⅵ	H	11.8	3.6		6.5	B, D, E	普通		淡茶褐	50	
10	坏 A Ⅵ	H	11.7	3.6		6.6	B, E	普通		淡黄褐	70	
11	坏 A Ⅵ	H	11.8	3.6		6.4	B, E, H	普通		暗黄褐	100	
12	坏 A Ⅵ	H	11.4	3.2		6.8	B, D, E	普通		淡黄褐	40	
13	坏 A Ⅵ	H	11.8	3.4		6.5	B, E	普通		黄褐	70	
14	坏 A Ⅵ	H	11.7	3.3		7.0	B, D, E	普通		暗黄褐	50	
15	坏 A Ⅵ	H	10.9	3.6		6.3	B, E	普通		暗茶褐	40	
16	坏 A Ⅵ	H	11.6	3.4		6.0	B, C, E	良好		淡橙	20	
17	坏 A Ⅵ	H	12.9	3.8		6.6	B, C, E	普通		黄橙	40	
18	坏 A Ⅳ	H	12.8	3.6		8.3	B, D, E	普通		黄褐	100	貯蔵穴No.7
19	坏 A Ⅵ	H	12.7	3.4		7.9	B, E	普通		浅黄橙	60	
20	坏 A Ⅳ	H	13.1	3.4		8.8	A, B, E	普通		黄褐	30	
21	坏 A Ⅵ	H	12.8	3.3		6.8	B, D, E	普通		淡黄橙	30	
22	坏 A Ⅵ	H	13.2	3.2		6.8	B, E	普通		黄褐	40	
23	坏 A Ⅳ	H	12.4	3.1		8.1	B, C, E	良好		黄橙	90	
24	坏 A Ⅵ	H	12.0	2.8		6.4	B, D, E	普通		淡黄褐	30	
25	皿	H	12.0	2.8		7.0	B, D, E	普通		淡橙	40	
26	皿	H	12.1	2.6		5.9	B, E	普通		淡黄褐	30	カマド
27	皿	H	13.1	2.2		8.7	B, D, E	普通		黄褐	70	
28	皿	H	13.7	2.3		9.5	B, D, E	普通		黄褐	50	
29	椀	S	12.6	3.5		6.4	B	良好	R	灰	30	
30	椀	N S	12.4	2.8		6.6	B, C, D	良好	R	灰白	70	
31	椀	N S	12.7	3.6		5.9	B, I	普通	R	灰白	30	
32	椀	H S	13.3	3.9		6.1	B, C, E	良好		橙	80	
33	椀	N S	12.7	3.5		5.8	E, I	良好		灰黄	50	
34	椀	N S	12.6	4.2		5.7	B, C, E	良好	R	にぶい褐	60	
35	椀	N S	12.3	4.1		5.2	B, G	良好	R	灰居白	75	
36	椀	N S	12.5	4.7		5.0	B, C, E	良好	R	灰白	40	カマド
37	椀	N S	12.5	4.4		5.5	B, C	良好	R	灰白	70	
38	椀	H S				6.5	B, E	良好	R	灰黄	40	
39	高台付椀	S	14.7	5.1		6.2	B	良好	R	灰白	50	
40	高台付椀	S	13.3	5.1		6.7	B, D	良好	R	灰	50	
41	高台付椀	N S	9.0	4.7		6.2	B, E, I	普通	R	灰白	70	
42	高台付椀	N S	14.5	5.4		4.5	B, E, I	良好	R	褐灰	80	貯穴
43	高台付椀	N S	14.5	5.3		4.4	B, C, E, G	良好	R	褐灰	50	貯穴
44	高台付椀	N S	14.5	5.1		6.9	B, E, I	普通	R	灰	60	
45	高台付椀	N S	14.7	5.0		6.3	B	良好	R	灰白	25	
46	高台付椀	N S	14.0	4.9		6.3	B, C, H	良好	L	外－黒色。内－浅黄橙（口縁は黒）		底－100。口－25
47	高台付椀	N S	16.7	7.0		6.0	B, C, E	良好	R	灰黄	50	
48	高台付椀	H S	13.3				B, E	良好	R	にぶい黄橙	30	
49	高台付椀	N S				8.9	B, E, I	良好	R	灰	30	
50	高台付椀	N S				6.1	B, E	良好	R	灰白	30	
51	高台付椀	N S				6.8	B, E	良好	R	灰白	30	
52	高台付椀	N S				6.1	B, E, I	良好	R	黄灰	30	

第329図　第197号住居跡